

教科横断型の探究的な学び（グローバル・ヒューマン学）
についての考察

教育科学専攻 理数・生活系領域

218M028 和田 欣子

2020年2月12日提出

目次

はじめに

序章

- 1 研究の背景と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第1章 パフォーマンス評価を導入した授業実践・・・・・・・・・・ 3

- 第1節 パフォーマンス課題の設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 第2節 授業実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 第3節 ルーブリックの作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 第4節 パフォーマンス評価の結果と考察・・・・・・・・・・・・・ 7
- 第5節 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

第2章 教科横断型の探究的な授業実践・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

- 第1節 教科横断型の授業の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- 第2節 授業実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 第3節 結果及び考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 第4節 パフォーマンス課題及びルーブリックの提案・・・・・・・・ 19
- 第5節 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

第3章 教科横断型の探究的な学び（グローバル・ヒューマン学）の全体構想・・・・・・・・ 23

- 第1節 育成する資質・能力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
- 第2節 教科横断型の探究的な学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
- 第3節 家政学・家庭科教育の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
- 第4節 家庭科を中核とした授業構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
- 第5節 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

終わりに

序章

1 研究の背景と目的

中央教育審議会（平成 28 年 12 月 21 日）において、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」が取りまとめられた。2030年の社会と、そして更にその先の豊かな未来において、一人一人の子供たちが、自分の価値を認識するとともに、相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、よりよい人生とよりよい社会を築いていくために、教育課程を通じて初等中等教育が果たすべき役割が示されている。答申では、学校を変化する社会の中に位置付け、学校教育の中核となる教育課程について、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていくという「社会に開かれた教育課程」を目指すべき理念として位置付けることとしている。また、情報化やグローバル化といった社会的変化は、人間の予想を超えて加速度的に進展するようになってきており、このような時代に、子供たち一人一人が、受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を發揮し、より良い社会と幸福な人生の作り手となる力を身に付けることが期待されている。前回の改訂で示された「生きる力」については、現代的な意義を踏まえてより具体化し、教育課程を通じて確実に育むことが求められている。これからの時代に育成すべき資質・能力として、①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」が挙げられている。また、各教科等を学ぶ本質的な意義を明らかにしていくことに加えて、学びを教科等の縦割りにとどめるのではなく、教科等を越えた視点で教育課程を見渡して相互の連携を図り、教育課程全体としての効果が發揮できているかどうか、教科等間の関係性を深めることでより効果を發揮できる場面はどこか、といった検討・改善を各学校が行うことであり、これらの各学校における検討・改善を支える観点から学習指導要領等の在り方を工夫することであると提言されている。

この答申を受けて、新学習指導要領においては、「カリキュラム・マネジメント」について、「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」「教科内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCA サイクルを確立すること」「教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること」を実現することとされた。

また、現代社会の諸課題に対応して求められる資質・能力として、複雑で変化の激しい社会の中で、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決するための力がますます重要となる。世界と社会の中における我が国を広く相互的な視野で捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるようにしていくことも重要となる。国際的に共有されている持続可能な開発目標（SDGs）なども踏まえつつ、自然環境や資源の有限性、貧困、イノベーションなど、地域や地球規模の諸課題について、子供一人一人が自らの課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげていく力を育てていくことが求められると提言されている。

三重県立 Y 高等学校は、平成 30 年度にスーパー・サイエンス・ハイスクール（以下 SSH）に指定された。激変する国際社会のなかで、社会の求める新たな価値を創造し、国際舞台で活躍できる科学技術系人材を育成することを目的として、「Y 高校版国際科学技術人材育成プログラム」の開発に取り組んでいる。研究の柱は、新たな価値創造を生み出す学校設定科目「探究」と、国際舞台で活躍するために必要となる資質・能力を育成する「グローバル・ヒューマン学」「科学総合」等の研究・開発である。「グローバル・ヒューマン学」は、現代社会の諸課題について、「世界史 A」、「現代社会」、「保健」、「家庭基礎」の各科目を教科横断的に扱い、グローバルな視点に加えて、科学的な視点を組み込み、多角的な視点で考察を加えながら議論するなど、探究的な学びを展開している。「グローバル・ヒューマン学」は、まさに前述の答申で示された提言を具現化しようとするものである。

本研究においては、新しい時代に必要となる資質・能力（生きて働く知識・技能、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間力等の涵養）が、教科横断型の探究的な学習をおこなう「グローバル・ヒューマン学」においてどのように効果的に育まれるのかについて、授業実践の分析と評価を通してその効果を検討し、改善の方向性を見だし、その結果から、家庭科を中核とした「グローバル・ヒューマン学」の授業構想を提案することを目的とする。

2 研究の方法

第 1 章では、「グローバル・ヒューマン学」の授業設計の方法を検討する。授業設計にあたっては「逆向き設計論」に基づき、深い学びを実現するために効果のある方法とされているパフォーマンス評価を導入する。パフォーマンス課題を設定した授業を実践し、ルーブリックを用いて学習者のパフォーマンスを評価する。その分析と評価の結果から、「グローバル・ヒューマン学」にパフォーマンス評価を導入することの意義や課題を明らかにする。

第 2 章では、教科を横断するテーマを設定した探究的な学習の授業構想について検討する。4 つの科目（「世界史 A」、「現代社会」、「家庭基礎」、「保健」）の学習を関連づけ、探究的な学習を取り入れた授業を実践し、質問紙調査による学習者の自己評価結果から、授業のテーマや内容について分析する。その結果から、各教科の学習と「グローバル・ヒューマン学」の学習を関連づけた授業の内容について明らかにする。

第 3 章では、第 1 章、第 2 章の結果から、さらに、新学習指導要領の背景、家政学の視点を踏まえて、家庭科を中核とした「グローバル・ヒューマン学」のカリキュラム構想を提案する。

なお、本研究では、Y 高等学校の SSH の研究開発において、筆者は、共同研究者として、学校設定科目「グローバル・ヒューマン学」の授業の研究・開発に携わっている。Y 高等学校の担当者と共同して授業の設計を行い、授業の観察及び個人が特定されない形でのデータ提供を受けて授業実践の分析及び評価を行った。研究対象とした授業は、第 1 章は平成 30 年 10 月～平成 31 年 1 月に、第 2 章は平成 31 年 4 年～令和元年 9 に、1 学年 360 名を対象として行ったものである。授業担当者は、Y 高校の「グローバル・ヒューマン学」の担当教諭である。

第1章 パフォーマンス課題を導入した授業実践

「グローバル・ヒューマン学」は、1 学年に2単位の学校設定科目として開設され、現代社会の諸課題を科学的な視点から捉えさせ、生命観、倫理観、歴史観、社会性を養成することを目的としている。この科目の設定にあたり、「世界史A」、「現代社会」、「保健」、「家庭基礎」の学習を効果的に関連付け、かつ教科横断的に実施する必要があるため、その単位の一部を減ずる研究開発の教育課程の特例を受けている。

本研究においては、教科横断型の探究的な学習を行う「グローバル・ヒューマン学」を研究対象とし、授業の設計にあたっては、ウィギンズ (G.Wiggins) とマクタイ (J.McTighe) (1998/2005) が提唱しているカリキュラム設計論である「逆向き設計」論を基となる理論とした。ウィギンズ (G.Wiggins) とマクタイ (J.McTighe) は、テストで測る学力は、知識の暗記・再生を中心とする限定的なものになりがちであるが、現実世界では、様々な場面で、思考力・判断力・表現力といった様々な力を試されており、学校で行われる評価もそのようにリアルな文脈で行うほうがより妥当な力が評価できる、また生きて働く学力を身に付けさせる上でも効果的である、と考える「真正の評価」論を唱えている。「真正の評価」を実践するためには、「求められている結果 (目標)」「承認できる証拠 (評価方法)」「学習経験と指導 (授業の進め方)」を三位一体のものとして考えることが提唱されており、教育によって最終的にもたらされる結果から遡って教育を設計する点から「逆向き設計」論と呼ばれている (西岡 2012)。

第1節 パフォーマンス課題の設定

西岡 (2016) は、「パフォーマンス課題」とは、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題を言い、「原理や一般化」についての「永続的理解」という重点目標に対応させて考案することが有効であるとしている。また、通常一問一答では答えられないような、論争的で探究を触発するような問い(「本質的な問い」)を問うことで、個々の知識やスキルが関連づけられ総合化されて「永続的理解」に至るとしている。

本研究の対象である「グローバル・ヒューマン学」は、「どうすればグローバルな視野で現代社会の諸問題を科学的な視点からとらえることができるのか」を探究させていくことをねらいとしている。そこで、パフォーマンス課題は、少子高齢化が一層進むことが予想される日本において、4つの科目(世界史A、現代社会、保健、家庭基礎)の視点から総合的に解決策を考えるという課題に取り組む授業を設計し、「高齢者問題」を取り上げることとした。

「本質的な問い」を、「どうすれば、高齢者の豊かな暮らしを実現することができるのか」とし、「永続的理解」は、「高齢者のための国連原則」(1999)¹⁾をもとに、「高齢者は、人として尊厳を保たなければならない。」(生命観、倫理観、尊厳)、「高齢者は、加齢によって心身の機能が衰えるが、もてる力をいかして社会の一員として自立した生活を送ることができる。」(自立、自己実現、参加)、「高齢者は、心身の状況に応じた支援が必要であり、社会全体で支えられることが必要である。」(ケア) ことの実践とした。

「本質的な問い」に対する「永続的理解」に至るための「パフォーマンス課題」は、リアルな状況で、様々な知識や技能を統合して使いこなすことを求める課題である (松下 2012) (西岡 2016)。本授業では、「パフォーマンス課題」を設定するにあたり、「逆向き設計」論で示されている6つの要素 (Goal : パフォーマンスの目的、Role : 役割、Audience : 誰が相手か、Situation : 想定されている状況、Product : 生み出す作品、パフォーマンス、Standard and criteria for success : 評価の観点) を取り入れて考えること

とした。そこで、本授業の「パフォーマンス課題」は、『皆さんには、S 高校生の立場でこれからの高齢者福祉のあり方を考えてもらいます。皆さんは、A 市民を対象とした R「これからの福祉を考えるフォーラム」での発表者になります（なると仮定します）。G 高齢者の豊かな暮らしとは何かを明らかにし、これを実現するためにはどうしたらよいかについて、P 具体的な提案を含めた発表を行ってください（考えてください）。S 評価はルーブリックを用いて行います。』とした。

第2節 授業実践

1 学年9クラス 360 名（平成 30 年度）を対象として、授業実践を行った。学習活動の概要は表 1-1 のとおりである。なお、1 時限は 65 分授業である。

「グローバル・ヒューマン学」での学習の前に、各科目（世界史 A、現代社会、保健、家庭基礎）において、高齢者問題に関する基礎的な知識・理解を深める学習ができるよう計画したが、教科の学習は年間指導計画に基づいて進められており、SSH の研究初年度でもあったため、十分調整して実施することが難しかった。

表 1-1 学習活動の概要

| |
|---|
| <p>各科目（世界史 A、現代社会、保健、家庭基礎）における高齢者問題に関連する学習</p> <p>世界史 A ・ ・ 歴史的背景の学習から見る現代世界の課題</p> <p>現代社会 ・ ・ 少子高齢社会における社会保障制度、社会生活と法</p> <p>保健 ・ ・ ・ ・ 現代社会と健康、生涯を通じての健康、社会生活と健康</p> <p>家庭基礎 ・ ・ 私たちの生活と福祉、高齢社会を生きる</p> |
| <p>「グローバル・ヒューマン学」の学習活動</p> <p>1 時間目 ・ ・ 高齢社会の現状や課題、高齢者の心身の特徴などを概説し、パフォーマンス課題を作成するためのシナリオを提示する。「高齢者の豊かな暮らし」を考えるには、どのような側面からアプローチしたらよいか班で話し合い、各自の担当分野を決める。DVD 視聴（「恋ちゃんはじめての看取り」、「高齢者の生活とサポート」）、高齢者のための国連原則の資料配付。</p> <p>2 時間目 ・ ・ 各自が自分の担当分野について、図書館・情報室を利用して調査する。</p> <p>3 時間目 ・ ・ 各自が自分の担当した分野について調査したことを班内で発表し、次回の班としての提案・意見発表について話し合う。発表資料はホワイトボードにまとめる。（デジカメで記録する）</p> <p>4 時間目 ・ ・ 各班から、発表資料を提示しながら、高齢者の豊かな暮らしの実現に向けて、提案・意見発表を行う。各自が、パフォーマンスの課題に対する提案・意見をまとめる。</p> <p>5 時間目 ・ ・ 学習のまとめ、振り返り</p> |

「逆引き設計」論では『知の構造』を、図 1-1 の左側のように捉えている。まず、最も低次には「事実に知識」と「個別スキル」が存在している。「事実に知識」と「個別スキル」は、あまり転移しないけれども、身につけておく価値のある内容を示す。「事実に知識」と「個別スキル」がより活用できるまで高まった知識やスキルが「転移可能な概念」と「複雑なプロセス」である。さらに、より高次には、「原理や一般化」に関する「永続的理解」がある。パフォーマンス課題については、このような「原理や一般化」についての「永続的理解」という重点目標に対応させて考案することが有効である（西岡 2016）。

そこで、この「知の構造」に表 1-1 に示した本研究の学習活動を対応させたイメージが図 1-1 の右側である。

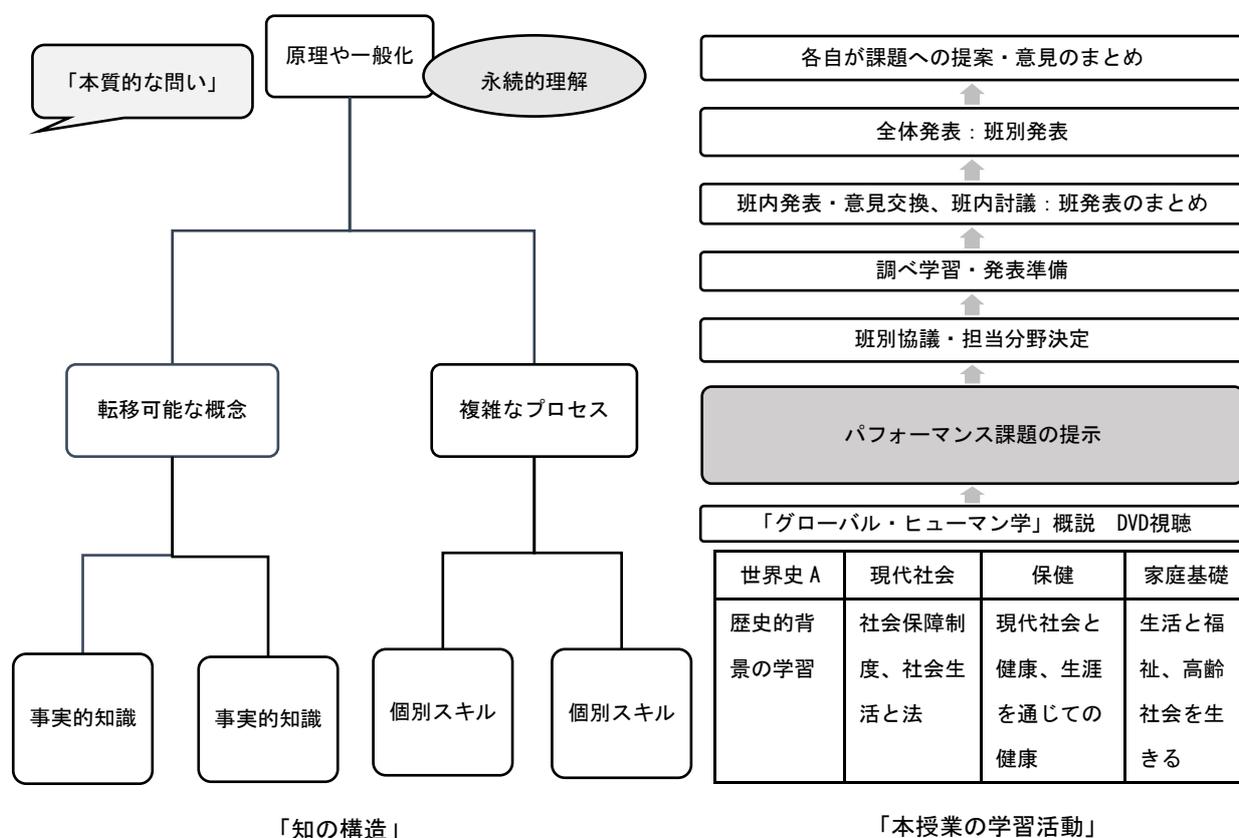


図 1-1 「知の構造」(西岡 2016)と「本授業の学習活動」との対応イメージ

第 3 節 ルーブリックの作成

パフォーマンス課題を評価するにあたり、ルーブリックを作成した。ルーブリックとは、成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれレベルに対するパフォーマンスの特徴を記した記述語からなる評価基準表である(西岡 2016)。『資質・能力を育てるパフォーマンス評価』(西岡 2016)を参考として、教員 4 人で以下の手順でルーブリックを作成した。

- ア ぱっと見た印象で、「5 すばらしい」「4 良い」「3 合格」「2 もう一歩」「1 かなりの努力が必要」という 5 つのレベルで採点する。互いの採点が分からないように、評点を付箋紙に書き、作品の後ろに貼りつける。
- イ 全員が採点し終わったら、付箋紙を作品の表に貼り直し、レベル別に作品群に分ける。それぞれのレベルに対応する作品群について、どのような特徴がみられるのかを読み取り、話し合いながら記述語を作成する。
- ウ 一通りの記述語ができたなら、評価が分かれた作品について検討し、それらの作品についても的確に評価できるように記述語を練り直す。

教員 4 人の評価の一致度は最初低かったが、記述語の見直しを重ねることで、評価基準が明確になり、評価の信頼性が高まった。記述語を練り直す中で、生徒の資質・能力をより丁寧に評価することができた。しかし、ルーブリックの作成にはかなりの時間を要し、一時的に評価の作業から離れると、評価の

基準のズレが生じやすく、評価の効率化が課題となった。

ルーブリックのレベルについては、多くのレベルを設定すると評価者の認知的負担が増大し、少なすぎると一つのレベルに幅広い作品が混在する問題が生じる。そこで、今回は、レベルを5段階とし、レベル「3」を本授業の目標を達成する段階として設定することにした。

ルーブリックの記述語（評価基準）は、ア.永続的理解（高齢者についての基本的な考え方）、イ.伝達（論理性、根拠の明示）、ウ.考察（提言内容）の3つの要素から構成することとした。学習者が、自身の学習到達度を把握し、より質的に高いレベルとは何かを理解することで、学びの指針として機能させたいと考えた。このため、できるだけ、学習者に分かりやすい表現とすることを心掛け、表1-2のルーブリックを完成版とした。

表 1-2 ルーブリック

| レベル | 記述語（評価基準） |
|---------------|---|
| 5 素晴らしい | ア 「高齢者の豊かな暮らしとは何か」について記述しており、高齢者についての基本的な考え方を理解している。 イ 論理的に記述しており、論じていることの根拠が的確に明示されている。 ウ 「実現するためにはどうすればよいか」の提言内容が、個人にとどまらず、地域や社会への広がりを持ち、独創的な内容である。 |
| 4 良い | ア 「高齢者の豊かな暮らしとは何か」について記述しており、高齢者についての基本的な考え方を理解している。 イ 論理的に記述してある。 ウ 「実現するためにはどうすればよいか」の提言内容が、個人にとどまらず、地域や社会へ広がっている。 |
| 3 合格 | ア 「高齢者の豊かな暮らしとは何か」について記述しており、高齢者についての基本的な考え方を理解している。 イ 概ね論理的に記述してある。 ウ 「実現するためにはどうすればよいか」の提言内容が、個人のレベルである。 |
| 2 もう一歩 | ア 「高齢者の豊かな暮らしとは何か」が記述してあるが、高齢者についての理解が不十分である。 イ 論理的に記述されていない。 ウ 「実現するためにはどうすればよいか」の提言内容が、不十分である。 |
| 1 かなり改善が必要 | ア 「高齢者の豊かな暮らしとは何か」が記述されていない。 イ 論点が大きくずれている。 ウ 「実現するためにはどうすればよいか」の提言が書かれていない。 |

ア. 永続的理解（高齢者についての基本的な考え方）、イ. 伝達（論理性、根拠の明示）、ウ. 考察（提言内容）

更に、ルーブリックの要素A.永続的理解（高齢者についての基本的な考え方）ができているかを読み取るために、「高齢者の豊かな暮らし」の記述内容を「高齢者のための国連原則」を参考にして、表1-3のとおり整理した。

表 1-3 「高齢者の豊かな暮らし」の記述例

| 項目 | 内容 |
|------|--|
| 自立 | <ul style="list-style-type: none"> ・十分な食料、水、住居、衣服、医療へのアクセスを得ることができる。 ・仕事や他の収入手段を得る機会がある。 ・退職時期の決定への参加が可能である。 ・適切な教育や職業訓練に参加する機会が与えられる。 ・安全な環境に住むことができる。 |
| 参加 | <ul style="list-style-type: none"> ・社会の一員として、自己に直接影響を及ぼすような政策の決定に積極的に参加し、若年世代と自己の経験と知識を分かち合うことができる。 ・自己の趣味と能力に合致したボランティアとして共同体へ奉仕する機会を求めることができる。 ・高齢者の集会や運動を組織することができる。 |
| ケア | <ul style="list-style-type: none"> ・家族及び共同体の介護と保護を享受できる。 ・医療を受ける機会が与えられる。 ・自主性、保護及び介護を発展させるための社会的・法律的サービスへのアクセスを得ることができる。 ・思いやりがあり、かつ、安全な環境で、保護、リハビリテーション、社会的関わりが持てる施設を利用することができる。 ・いかなる場所に住み、あるいはいかなる状態であろうとも、自己の尊厳、信念、要求、プライバシー及び自己の介護と生活の質を決定する権利に対する尊重を含む基本的人権や自由を享受することができる。 |
| 自己実現 | <ul style="list-style-type: none"> ・自己の可能性を発展させる機会を追及できる。 ・社会の教育的・文化的・精神的・娯楽的資源を利用することができる。 |
| 尊厳 | <ul style="list-style-type: none"> ・尊厳及び保障を持って、肉体的、精神的虐待のない生活を送ることができる。 ・年齢、性別、人種、民族的背景、障害等に関わらず公平に扱われ、自己の経済的貢献に関わらず尊重される。 |

注)「高齢者のための国連原則」を参考に作成

第4節 パフォーマンス評価の結果と考察

① パフォーマンス評価の結果

本授業のパフォーマンス課題を導入した学習における評価は図1-3のとおりである。

評価の全体平均は3.32であり、レベル3（合格）が53.1%、レベル4が38.3%であり、到達すべきレベル以上が92.3%であったことから、学習者は概ね授業の目標を達成できたと考えられる。

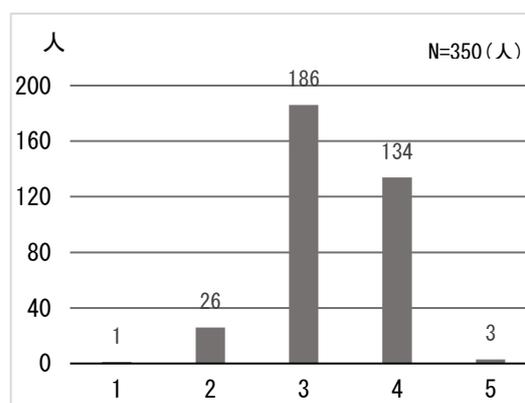


図 1-3 パフォーマンス評価の結果

② 「高齢者の豊かな暮らしとは何か」の記述内容の分析

パフォーマンス課題に対する学習者から提出された作品の記述内容を詳細に分析した。

「高齢者の豊かな暮らし」は、「自立して生活することができる」、「生きがいをもって生活することができる」、「自分の持てる力を発揮することができる」、「心身ともに健康で、安心して暮らすことができる」などの記述が多くみられた。「高齢者の豊かな暮らしとは何か」について記述されていた内容を読み取り、表3の5項目に整理したものが図1-4である。

「自立」、「自己実現」の2項目については、70.6%の学習者が記述しており、「参加」については63.7%、「ケア」については52.0%、「尊厳」については10.3%であった。図1-5は、記述されていた項目数である。3項目を記述していたのは35.7%、2項目は28.0%、4項目以上は19.1%であった。

図6は、班発表時の資料から「高齢者の豊かな暮らし」の内容を5項目で分類したものであり、図1-7は項目数である。図1-4と図1-6の記述内容を比較してみると、個人が記述した方が「尊厳」の項目を除いて増加している。図1-5と図1-7の項目数を比較してみると、3項目以上は、班発表時は41.2%であったが、課題提出時には54.8%となっている。「パフォーマンス課題」の提示 ⇒ 班別協議・担当分野決定 ⇒ 各自が調べ学習・発表準備 ⇒ 班内発表・意見交換 ⇒ 全体発表(班発表) ⇒ 各自が課題をまとめる、という学習活動のなかで、学習者の新たな気づきや思考を深めることができたのではないかと考える。

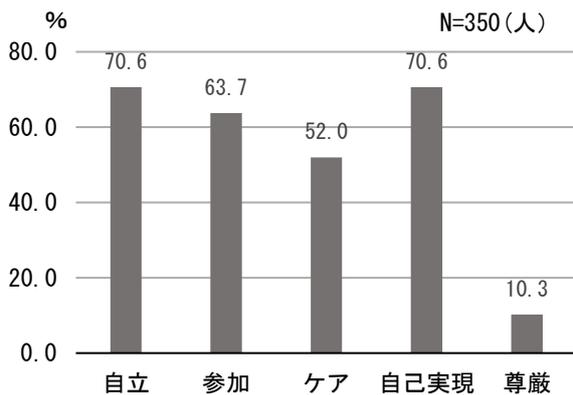


図1-4 「高齢者の豊かな暮らし」の記述内容

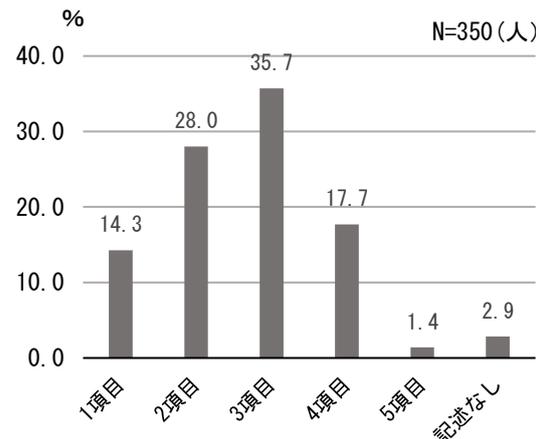


図1-5 「高齢者の豊かな暮らし」の記述内容の項目数

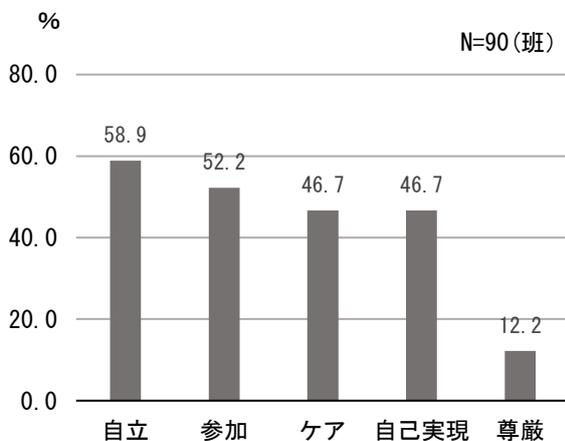


図1-6 班発表での「高齢者の豊かな暮らし」の内容

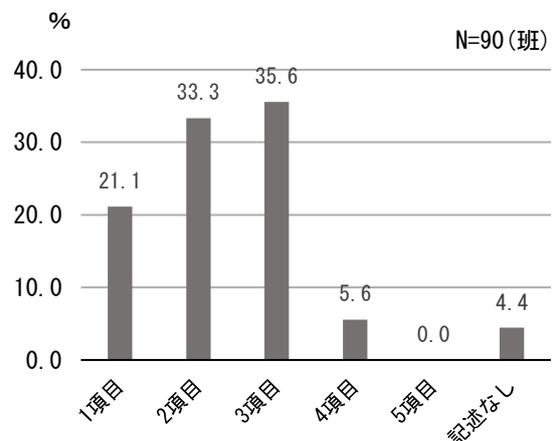


図1-7 班発表での「高齢者の豊かな暮らし」の記述内容の項目数

③ 「高齢者の豊かな暮らしを実現するにはどうすればよいか」の記述内容の分析

次に、「提言内容」について、記述内容の共通性について把握するため、テキストマイニングソフト KHCoder で共起ネットワーク図（図 1-8）を作成した。共通性のあるカテゴリーとして、「個人の努力」「介護制度」「社会制度」「地域の支援」「その他」の 5 つに分類することとした。

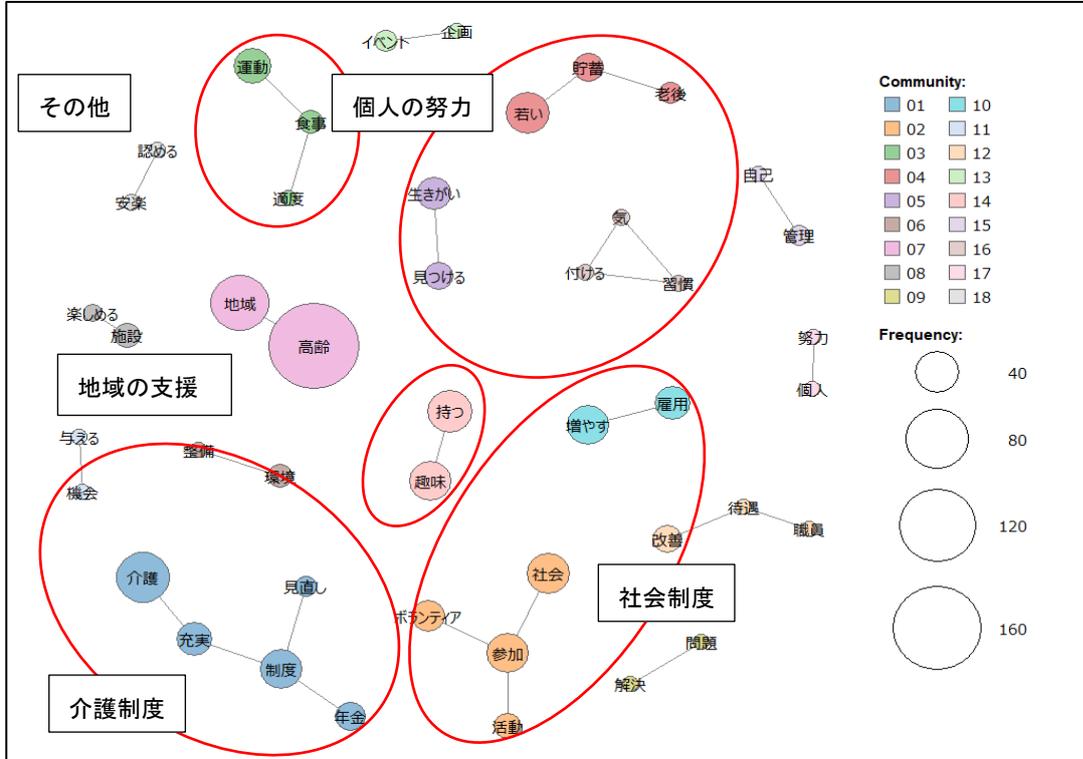


図 1-8 「提言内容」の共起ネットワーク（Jaccard 係数が 0.2 以上の共起関係だけを表示）

主な提言内容をまとめたものが、表 1-4 である。

表 1-4 具体的な提言内容(主なもの)

| | |
|-------|---|
| 個人の努力 | 規則正しい生活・適度な運動・バランスの良い食事を心がける、趣味を持つ、若い時からの貯蓄、家事能力を身につける、地域行事やボランティア活動への参加、自分の能力や特技を生かして社会とつながる、若い世代と積極的に交流 |
| 介護制度 | 介護サービスの充実、介護職員の待遇改善、介護保険制度の充実、在宅介護・地域包括支援の充実、介護ロボット等の導入 |
| 社会制度 | 高齢者の雇用の促進、高齢者の特技を地域に還元できる制度、高齢者に配慮した社会環境の整備、年金制度の改善、高齢者に対する福祉制度の充実、物理的・精神的・制度的・情報的・バリアフリーの推進 |
| 地域の支援 | 高齢者の地域での居場所をつくる、地域で高齢者と若者が交流できる場や機会をつくる、高齢者が活躍できる場（地域パトロール隊、子育て支援、社会貢献ボランティア等）をつくる |
| その他 | 高齢者の働く場の確保、高齢者に使いやすい商品の開発、ユニバーサルファッション、高齢者のためのコンパクトシティ、高齢者支援の NPO |

図1-9は、提言として記述されていた表1-4の内容を分類したものを頻度で示したものである。「個人の努力」に関する記述が59.7%で最も多く、次いで、「地域の支援」46.9%、「社会制度」34.0%、「介護制度」16.9%であった。図1-10は、具体的な提言内容の数である。具体的な提言が1項目というものが45.7%、2項目が37.1%、3項目以上が16.3%であった。

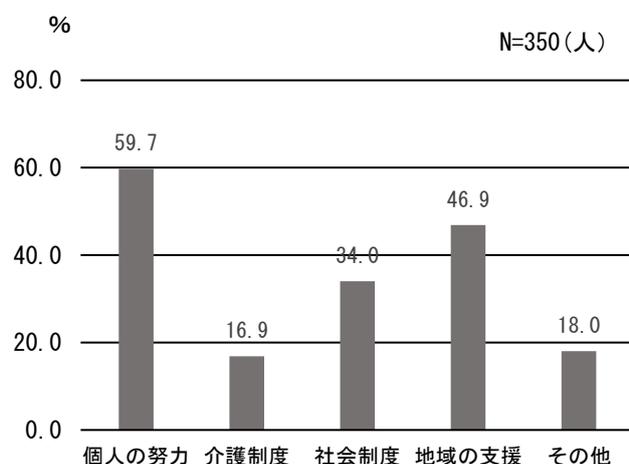


図1-9 「具体的な提言」の記述内容(複数回答)

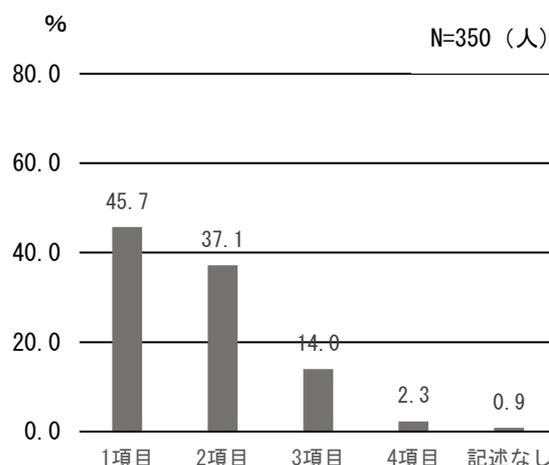


図1-10 「具体的な提言」の記述内容の項目

第5節 まとめ

本研究の結果から以下の知見を得た。

教科横断型の探究的な学び（グローバル・ヒューマン学）におけるパフォーマンス評価の導入について検討した結果、有効性が検証された。成果として把握できたことは2点あげられる。

1点目は、ルーブリック活用の有効性である。授業の評価の信頼性（評価対象をどの程度安定的に一貫して測られているか（吉原 2010））について、ルーブリックを活用した評価を進める中で、複数の評価者の最初の評価段階の一致度は約80%であった。記述語の見直しを重ねながら修正し、一致させていく必要があったが、ルーブリックの活用にある程度慣れれば一致度は上がることが分かった。ルーブリックは、複数の評価者の間で評価基準を共通理解するうえで有効であると考えられる。ルーブリックを使って評価を行うことにより、学習者の思考過程や知識を活用する力をより深くみることができた。また、多くの学習者が新たな気づきを得たり思考を深めたりしていることが分かった。ルーブリックを活用した評価の妥当性（評価対象をどれほどよく測れているか（吉原 2010））はあると考えられる。授業後に、学習者にルーブリックを提示することにより、自身の学習到達度を把握し、より質的に高いレベルとは何かを理解することができた。ルーブリックは、学びの指針として機能させることができると考えられる。

2点目は、パフォーマンス課題を導入した授業設計の有効性である。パフォーマンス課題を導入した授業を設計することによって、各教科の基礎的な知識・理解やスキルをもとに、現実的な課題解決の最適解を導き出そうとするなかで、既習の知識やスキル、経験などが関連づけられ、総合化されていくのではないかと考えた。授業の分析及び評価結果から、教科横断型の探究的な学びを軸とする「グローバル・ヒューマン学」においては、パフォーマンス課題を導入した授業実践は有効であると考えられる。

パフォーマンス評価として、ルーブリックを5段階に設定し、レベル5の記述語（評価基準）を設定したが、レベル5とした作品がほとんどなかった。このことから、今後の課題について3点指摘したい。1点目は、各教科の基礎的な知識・理解を基に、現代社会の課題に対する解決策を考えるというパフォ

パフォーマンスの課題に迫るためには、基となる各教科の知識やスキルを関連付け、総合化するということが必要である。この点が十分にできていなかったことがあげられる。各教科の学習と「グローバル・ヒューマン学」の学習を関連づけた授業計画を構想していく事が必要である。2点目は、「独創的な内容」を提言するには、実態や現実の課題を体験的に理解することや、先進的な事例を実地調査するなどのダイナミックな学習活動を取り入れていく事も必要ではないかと考える。3点目は、パフォーマンス評価の妥当性についてはある程度認められたが、設定した「パフォーマンス課題」及び「ルーブリック」について、学習者の実態なども踏まえて、さらなる検証が必要である

注

1) 1999年12月16日 国連総会決議・採択

自立(independence)、参加(participation)、ケア(care)、自己実現(self-fulfilment)、尊厳(dignity)

参考文献

G.ウィギンズ&J.マクタイ著(1998/2005)、西岡加名恵訳(2012)『理解をもたらすカリキュラム設計「逆向き設計」の理論と方法』日本標準

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」文部科学省(2016)

西岡加名恵(2017)『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』明治図書出版

西岡加名恵編(2016)『教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか—』図書文化社

松下佳代(2007)『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準

吉原崇恵編著(2010)『子どもがいきる家庭科』開隆堂

第2章 教科横断型の探究的な学習の授業実践

第1節 教科横断型の授業の概要

本研究の対象である「グローバル・ヒューマン学」は、「現代社会の諸課題を科学的な視点から捉えさせ、生命観、倫理観、歴史観、社会性を育む」ことを目標としており、「どうすればグローバルな視野で現代社会の諸問題を科学的な視点からとらえることができるのか」を探究させていくことをねらいとしている。

授業実践1年目では、各教科の基礎的な知識理解を基に、現代社会の課題に対する解決策を考えると、パフォーマンスの課題に迫るためには、基となる各教科の知識やスキルを関連付け、総合化することが必要であることが分かった。

そこで、授業実践2年目は、可能な限り、各教科の学習と「グローバル・ヒューマン学」の学習を関連づけた授業計画を構想することとした。「グローバル・ヒューマン学」は、GHA（現代社会、世界史A）、GHB（保健）、GHC（家庭基礎）の3人の教員が担当しており、4つの科目（世界史A、現代社会、保健、家庭基礎）の視点から総合的に解決策を考えるという課題に取り組むことができるように、表2-1の年間授業計画を立てた。オリエンテーションでは、「私たちが目指す世界」というSDGsに関する小冊子を配付して、「SDGs」を意識した授業展開を行っていくことを説明した。

前期のテーマには、4つの科目（世界史A、現代社会、保健、家庭基礎）の視点から取り組みやすい「労働」を取り上げ、課題解決の方法を多角的に考える授業を設計した。後期は、「環境問題」「高齢者問題」を設定した。

本節では、前期におこなった「労働」をテーマとした授業（□の部分）について述べる。

表2-1 年間授業計画

| 回 | GHA（現代社会、世界史A） | GHB（保健） | GHC（家庭） |
|----|----------------|-----------------|------------------|
| 1 | はじめに | 現代社会と健康 | 様々なライフスタイルと家族 |
| 2 | 労働問題（労働問題の歴史） | 社会生活と健康 | 家族と法律 |
| 3 | 労働問題（労働法） | 日本の労働環境 | 家事と就労、ワークライフバランス |
| 4 | 労働問題（課題） | 調べ学習（労働） | 青年期の自立 |
| 5 | 市民革命（産業革命） | 調べ学習（労働）、中間発表 | 子育て支援、集団保育 |
| 6 | 人権宣言文、人権国際化 | レポート作成（労働） | 社会と家庭生活 |
| 7 | 紛争と難民問題 | レポート（労働）の振り返り | レポート発表（労働） |
| 8 | 環境問題（様々な環境問題） | SDGsとは | 保育ふれあい実習 |
| 9 | 環境問題（課題の克服） | 環境問題 | 生活を取り巻く環境問題 |
| 10 | エネルギー問題 | 調べ学習（環境問題） | 高齢者問題 |
| 11 | 紛争と難民問題（南北問題含） | 調べ学習、レポート作成（環境） | 高齢者問題 |
| 12 | 社会保障（高齢化問題） | 中間討論会 | レポート作成（高齢者問題） |
| 13 | 社会保障（課題） | レポート作成（環境問題） | レポート発表（高齢者問題） |
| 14 | 諸問題の解決への糸口 | グループ発表（環境問題） | レポート作成（環境問題） |
| 15 | まとめ | 全体発表 | |

第2節 授業実践

1 学年9クラス 360 名（平成 31 年度）を対象として、授業実践を行った。学習活動の概要は表 2-2 のとおりである。なお、1 時限は 65 分授業である。

表 2-2 学習活動の概要

| |
|--|
| <p>各科目（世界史 A、現代社会、保健、家庭基礎）における労働に関連する学習</p> <p>世界史 A・・・歴史的背景の学習から見る現代世界の課題</p> <p>現代社会・・・労働者の権利、現代の雇用・労働問題、国際経済のしくみと動向</p> <p>保健・・・現代社会と健康、日本の労働環境、社会生活と健康</p> <p>家庭基礎・・・これからの社会と家庭生活（ワークライフバランス）、経済生活を営む</p> |
| <p>「グローバル・ヒューマン学」の学習活動</p> <p>1 時間目・・・各自が図書館、情報室を利用して調査する。</p> <p>①テーマを設定する。「労働」×（ ）</p> <p>②「調べて分かった過去の出来事」についてまとめる。</p> <p>③「過去の出来事から見える現状認識」についてまとめる。</p> <p>④「私が目指す未来像」についてまとめる。</p> <p>2 時間目・・・テーマ別に集まり、グループ内で各自が調査した内容を中間発表し、意見交換を行う。</p> <p>3 時間目・・・クラスを 8 班に分け、班内で各自が調査したことを発表する。評価レポートにまとめる。</p> <p>アンケート調査</p> <p>4 時間目・・・各自が、課題に対する提案・意見をまとめる。</p> <p>学習のまとめ、振り返り</p> |

第3節 結果及び考察

① 学習者のとらえる「労働」に関する課題（テーマ）

図 2-1 は、学習者が設定した課題（テーマ）を、「労働問題」、「AI、科学技術の発展」、「法律・法整備」、「家庭・生活」、「労働者」、「雇用」、「労働環境」、「職業」、「その他」の 9 のカテゴリーで分類したものである。最も多かったのは、「労働問題」23.6%、次いで「労働環境」15.9%、「労働者」15.6%であった。

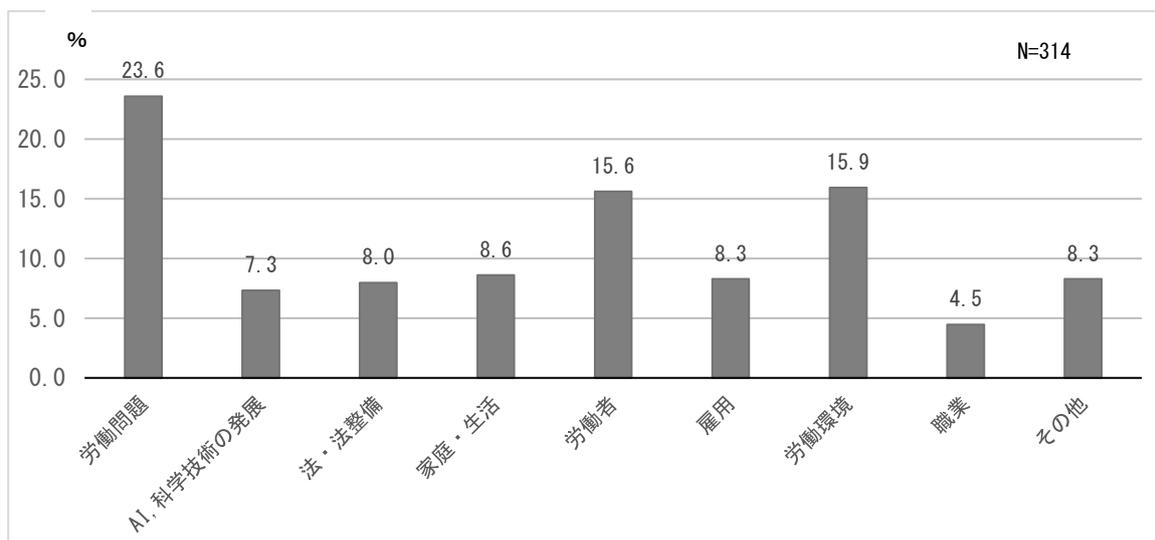


図 2-1 設定テーマの分類

表2-3は、9つのカテゴリーに分類した設定テーマの主なものである。また、9つのカテゴリー分類と「グローバル・ヒューマン学」の学習の基礎となる各科目の関連を示した。

表2-3 設定テーマ（労働×（テーマ）の主なもの）

| 設定テーマ分類 | 設定率 | 主なもの | 関連する科目 |
|------------|------|---|-----------------------------|
| 労働問題 | 23.6 | ハラスメント、ブラック企業、男女差別、過労死、過労自殺、働きすぎ、ニート、ワーキングプア、男女格差問題、失業、残業ブラック | 現代社会 保健 |
| AI、科学技術の発展 | 7.3 | AI、機械化、脳科学、情報化社会、SNS、インターネット、コンピュータ、ロボット | 現代社会 保健 |
| 法律、法整備 | 8.0 | 法律、育児休暇、給与制度 | 現代社会 |
| 家庭、生活 | 8.6 | 家庭、育児、私生活、健康、睡眠、貧困、食物、家族、家庭 | 家庭基礎 保健 |
| 労働者 | 15.6 | 若者、女性、高齢者、外国人、児童、技能実習生 | 現代社会 家庭基礎 |
| 雇用 | 8.3 | 非正規雇用、在宅勤務、学歴、フリーター、障害者雇用、フリーランス | 現代社会 |
| 労働環境 | 15.9 | 労働時間、服装、残業、企業の成長、中国、やる気、上司、地方過疎化、働き方改革、労働組合、少子高齢化、日本とドイツ、24時間営業 | 保健 現代社会 世界史 A 家庭基礎 |
| 職業 | 4.5 | 農業、医師、教員、サービス、コンビニエンスストア | 現代社会 |
| その他 | 8.3 | ボランティア、宗教、教育、スポーツ、ディズニー、心理、NGO、文房具、伝統工芸品、キャリアデザイン、ILO | |

学習者が設定した課題（テーマ）は多岐にわたり、様々な視点から労働に関する課題を捉えていることが分かる。

授業後に行った質問紙調査の結果（自己評価）が図2-2である。「労働」について考える視点がひろがったか」という質問に対して、最も多かったのは「とてもそう思う」43%で、次いで「そう思う」40%、「ややそう思う」15%、「あまり思わない」1%、「分からない」1%、であった。「とてもそう思う」「そう思う」を合わせると83%を占めた。

テーマごとの中間発表や意見交換、グループでの発表などの学習を通して、学習者自身が「労働」について考える視点が広がったと捉えていることが分かった。

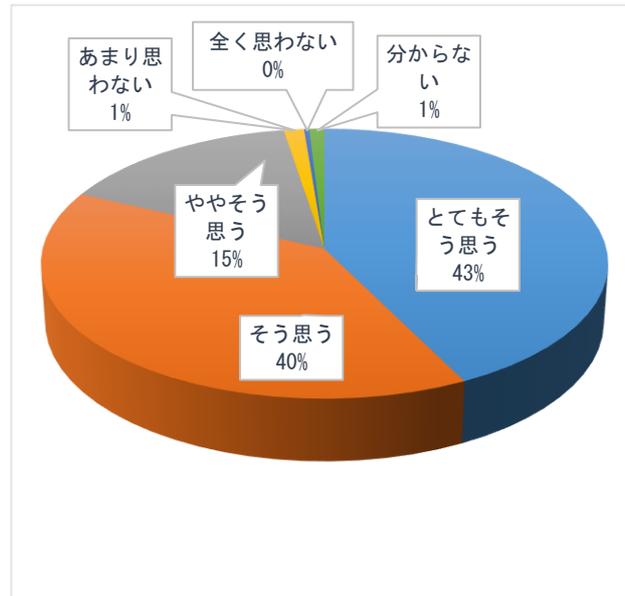


図2-2 「労働」について考える視点の広がり（自己評価）

② 学習者の学び・気づき

授業後に実施した学習者に対する質問紙調査の結果は、図2-3である。「労働」の学習を振り返っての自己評価の結果である。

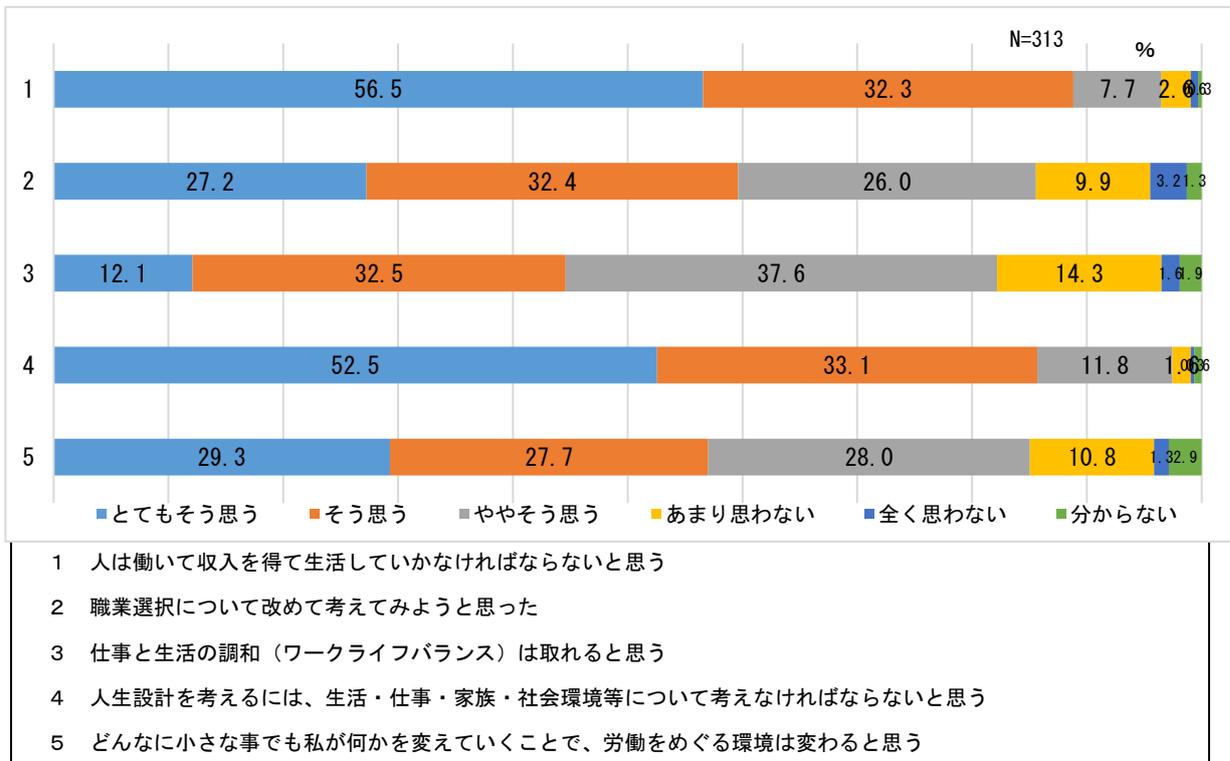


図2-3 「労働」の学習を振り返って（自己評価）

質問項目1「人は働いて収入を得て生活していかなければならないと思う」という「労働の価値や意義」については、「とてもそう思う」56.5%、「そう思う」32.3%を合わせた肯定意見は88.8%で、「ややそう思う」を加えると96.5%となり、概ね理解されたと捉えることができる。

質問項目2「職業選択について改めて考えてみようと思った」という「自分毎として考えたかどうか」については、「とてもそう思う」27.2%、「そう思う」32.3%を合わせた肯定意見は59.5%で、「ややそう思う」25.9%を加えると85.3%となり、自分毎として考える機会となったと捉えることができる。

質問項目3「仕事と生活の調和（ワークライフバランス）は取れると思う」という「生活への展望」については、「とてもそう思う」12.1%「そう思う」32.6%を合わせた肯定意見は44.7%で、他の項目と比較すると低い。「ややそう思う」37.7%を加えると82.4%となるが、「あまり思わない」14.4%「思わない」1.6%をくわえると16%となり、否定意見が一定数あることが分かった。

質問項目4「人生設計を考えるには、生活・仕事・家族・社会環境等について考えなければならないと思う」という「視野の広がり」については、「とてもそう思う」52.7%、「そう思う」34.6%を合わせた肯定意見は87.3%で、「ややそう思う」11.6%を加えると98.9%となり、概ね理解されたと捉えることができる。

質問項目5「どんなに小さな事でも私が何かを変えていくことで、労働をめぐる環境は変わると思う」という「市民としての地域・社会への実践力」については、「とてもそう思う」29.4%、「そう思う」27.8%を合わせた肯定意見は57.2%で、「ややそう思う」28.1%を加えると85.3%となった。「地域・社会への実践力」については、一定数の否定意見があることが分かった。

③ 設定テーマと「労働」の学習後の自己評価の結果

ア 質問項目1「人は働いて収入を得て生活していかなければならないと思う」との関係

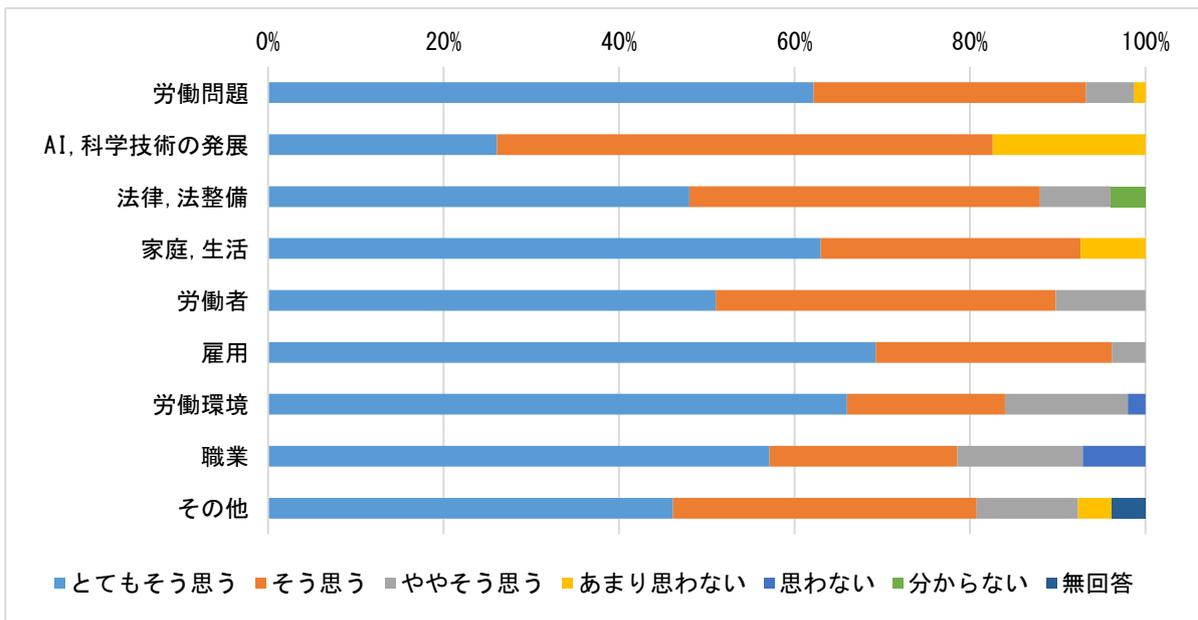


図 2-4 設定テーマと質問項目1の自己評価結果

設定テーマと質問項目1「人は働いて収入を得て生活していかなければならないと思う」との間には、カイ二乗検定の結果、有意差が認められた(p<0.05)。

設定テーマと質問項目1の自己評価結果(図2-4)は、設定テーマを「AI、科学技術の発展」とした群は、「人は働いて収入を得て生活していかなければならないと思う」に対して、「とてもそう思う」が26%、「そう思う」56.5%、「あまり思わない」17.4%、であり、否定的な意見の割合が、他のテーマ設定群と比較して高かった。

イ 質問項目2「職業選択について改めて考えてみようと思った」との関係

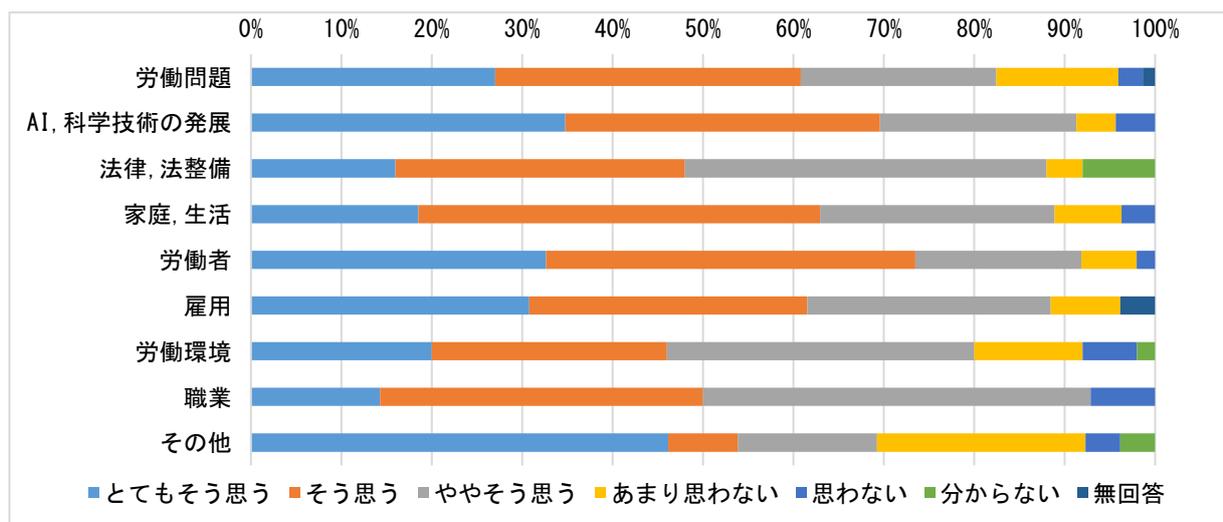


図 2-5 設定テーマと質問項目2の自己評価結果

設定テーマと質問項目2「職業選択について改めて考えてみようと思った」との間には、カイ二乗検定の結果、有意差は認められなかった。

設定テーマと質問項目2の自己評価結果(図2-5)は、設定テーマを「労働環境」に設定した群は、「とてもそう思う」27.4%、「そう思う」34.2%、「あまり思わない」13.7%、「思わない」3.7%で、否定的な意見が約2割あった。また、「労働問題」をテーマに設定した群も、「とてもそう思う」20.4%、「そう思う」26.5%、「あまり思わない」12.2%、「思わない」6.1%で、他のテーマ群と比較すると、否定的な意見の割合が高かった。

ウ 質問項目3「仕事と生活の調和(ワークライフバランス)は取れると思う」との関係

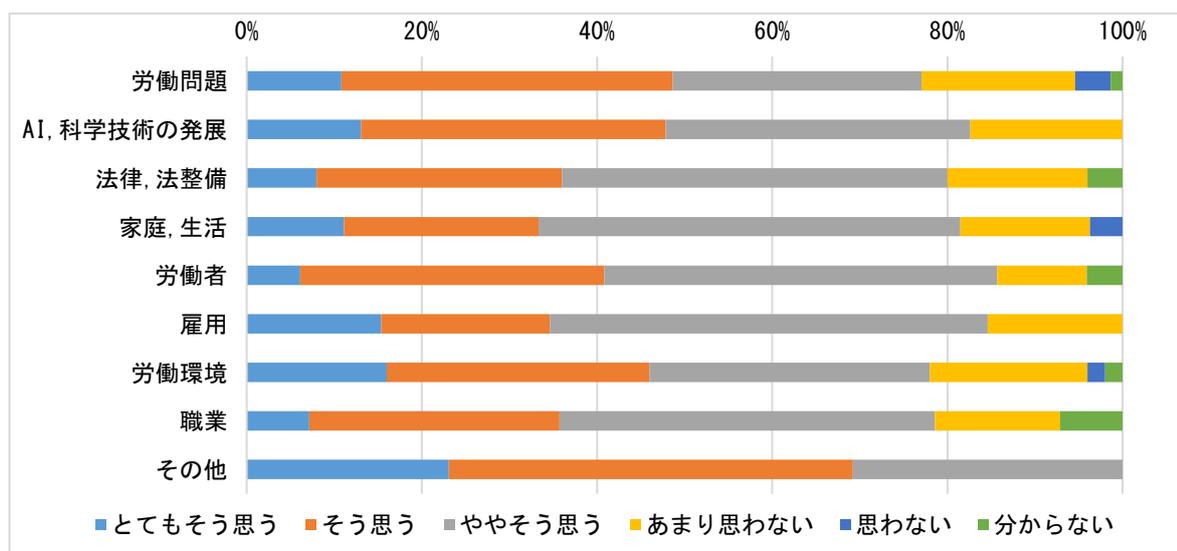


図 2-6 設定テーマと質問項目3の自己評価結果

設定テーマと質問項目3「仕事と生活の調和(ワークライフバランス)は取れると思う」との間には、カイ二乗検定の結果、有意差は認められなかった。

設定テーマと質問項目3の自己評価結果(図2-6)は他の質問項目と比較すると、全体的に「とて

もそう思う」「そう思う」の肯定的意見の割合が低く、「あまり思わない」「思わない」という否定的意見の割合が高かった。

エ 質問項目4「人生設計を考えるには、生活・仕事・家族・社会環境等について考えなければならないと思う」との関係

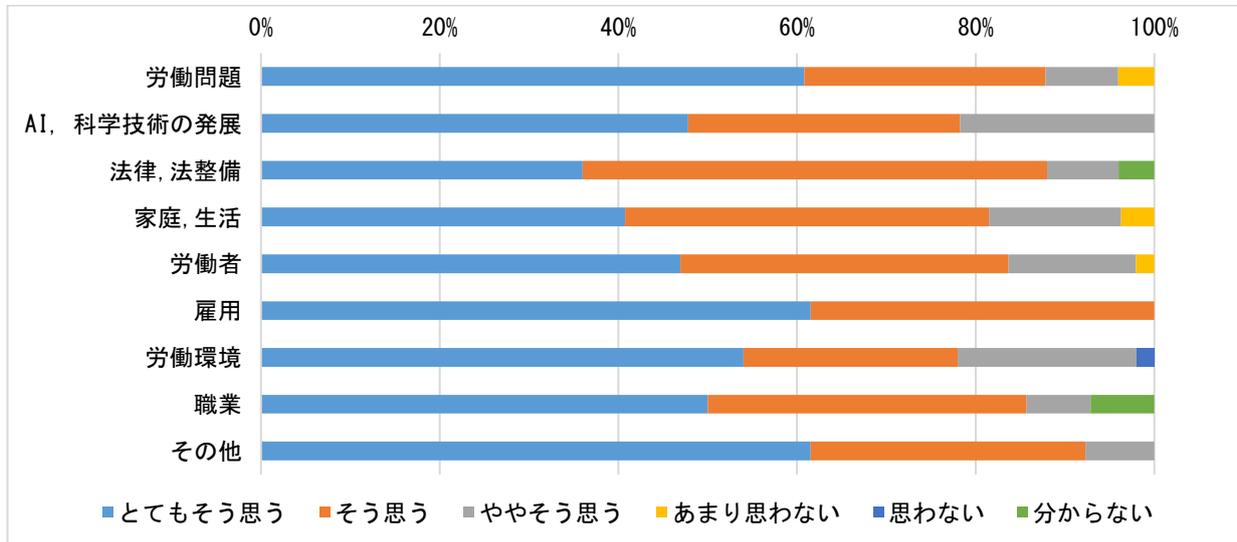


図 2-7 設定テーマと質問項目4の自己評価結果

設定テーマと質問項目4「人生設計を考えるには、生活・仕事・家族・社会環境等について考えなければならないと思う」との間には、カイ二乗検定の結果、有意差は認められなかった。

設定テーマと質問項目4の自己評価結果(図2-7)は、他の質問項目と比較すると肯定的意見の割合が高かった。

オ 質問項目5「どんなに小さな事でも私が何かを変えていくことで、労働をめぐる環境は変わると思う」との関係

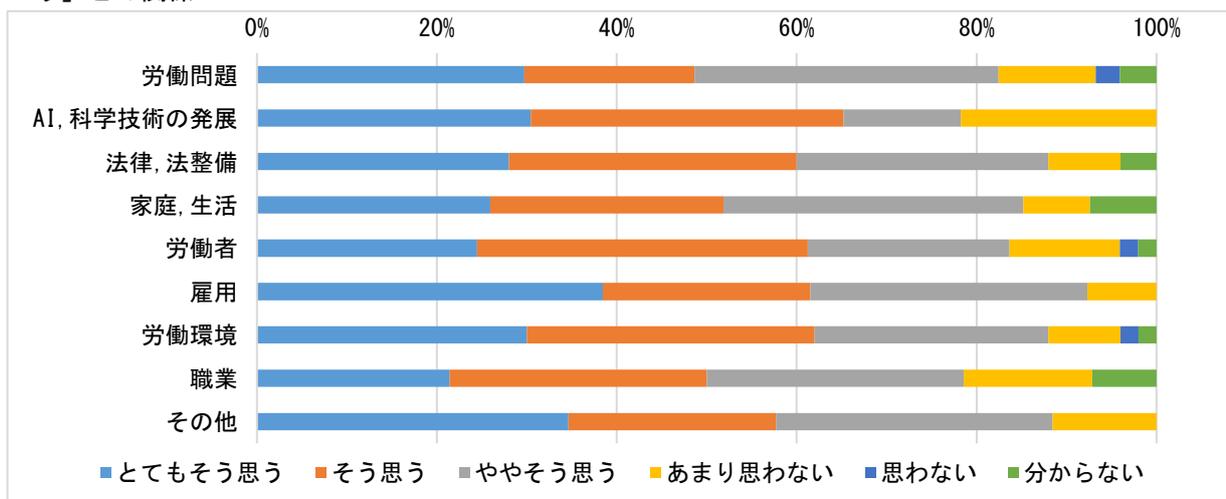


図 2-8 設定テーマと質問項目5の自己評価結果

設定テーマと質問項目5「どんなに小さな事でも私が何かを変えていくことで、労働をめぐる環境は変わると思う」との間には、カイ二乗検定の結果、有意差は認められなかった。

設定テーマと質問項目5の自己評価結果(図2-8)は他の質問項目と比較すると、全体的に「とても

そう思う」「そう思う」の肯定的意見の割合が低く、「あまり思わない」「思わない」という否定的意見の割合が高かった。

第4節 パフォーマンス課題及びルーブリックの提案

授業実践2年目は、4つの教科が統一テーマで連携して取り組むことを主目的として授業実践を行った。4つの教科が連携して取り組むことはできたが、連携して取り組む授業の目標を明確にして、各教科の授業担当者が共通理解を図って取り組むという点では課題が残った。

そこで、4つの教科が連携して取り組む「労働」に関する課題を取り上げる授業における、到達目標（「本質的な問い」に対する「永続的理解」）、「パフォーマンス課題」及び「ルーブリック」について提案したい。

「労働」に関する課題は、SDGs（持続可能な開発目標）目標8のターゲット（表2-4）を基として考えることとした。つまり、長期的な経済成長を継続していくためには、生産性を高めた産業の拡大が必要となる。それと共に、その要となる労働者が獲得する収入や健康、教育、就業機会を平等にし、著しく不利な立場に置かれる人をなくすこと、そして人々が適切で継続的に営める生活を送れる環境を作ることが重要である。収入やその他の面における不平等は長期的な経済成長を著しく阻害すると考えられている。これらを打開するために、目標8では持続可能な経済成長の達成、そしてそれを実現するために不可欠である包摂的、かつ持続可能な雇用の拡大を目指し表8のターゲットを定めている。^{注1}（出典：国連開発計画（UNDP）駐日代表事務所公式サイト）

この目標8「すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）を推進するためにはどうすればよいか（働きがいも経済成長も）」を取り上げ、「働きがいも経済成長も実現するにはどうすればよいか」を「パフォーマンス課題」として設定することとした。

「本質的な問い」は、「どうすれば、全ての人の権利が守られ、働きがいがあり、十分な収入のある人間らしい働き方ができるのか」とし、「永続的理解」は、SDGs目標8のアジェンダ¹⁾を参考として、「全ての人（若者や障害者を含む全ての男性及び女性）は、働きがいがあり、十分な収入のある仕事につくことができる。」「人間のあらゆる権利が守られ、生活が安定できる仕事（ディーセントワーク）を実現していくことが必要である。」「仕事とプライベートの両方が充実したより良い生活を送れるように環境を改善していかなければならない。」とした。

「パフォーマンス課題」は、「逆向き設計」論（ウィイギンズ（G.Wiggins）、マクタイ（J.McTighe）（1998/2005））で示されている6つの要素（Goal：パフォーマンスの目的、Role：役割、Audience：誰が相手か、Situation：想定されている状況、Product：生み出す作品、パフォーマンス、Standard and criteria for success：評価の観点）を取り入れて考えた。

そこで、本授業の「パフォーマンス課題」は、『G「どうすれば、働きがいも経済成長も実現することができるのか」について考えてください。まず、「働きがいのある人間らしい働き方」とはどのようなものを明示し、P具体的な提言内容をまとめ、S日本の若者代表として A世界市民フォーラムでポスター発表してください。S評価はルーブリックを用いて行います。』とした。

表 2-4 SDGS 目標 8 ターゲット

| 項目 | ターゲット |
|------|--|
| 8.1 | 各国の状況に応じて、一人当たり経済成長率を持続させる。特に後発開発途上国は少なくとも年率7%の成長率を保つ。 |
| 8.2 | 高付加価値セクターや労働集約型セクターに重点を置くことなどにより、多様化、技術向上及びイノベーションを通じた高いレベルの経済生産性を達成する。 |
| 8.3 | 生産活動や適切な雇用創出、起業、創造性及びイノベーションを支援する開発重視型の政策を促進するとともに、金融サービスへのアクセス改善などを通じて中小零細企業の設立や成長を奨励する。 |
| 8.4 | 2030年までに、世界の消費と生産における資源効率を漸進的に改善させ、先進国主導の下、持続可能な消費と生産に関する10年計画枠組みに従い、経済成長と環境悪化の分断を図る。 |
| 8.5 | 2030年までに、若者や障害者を含む全ての男性及び女性の、完全かつ生産的な雇用及び働きがいのある人間らしい仕事、並びに同一労働同一賃金を達成する。 |
| 8.6 | 2020年までに、就労、就学及び職業訓練のいずれも行っていない若者の割合を大幅に減らす。 |
| 8.7 | 強制労働を根絶し、現代の奴隷制、人身売買を終わらせるための緊急かつ効果的な措置の実施、最悪な形態の児童労働の禁止及び撲滅を確保する。2025年までに児童兵士の募集と使用を含むあらゆる形態の児童労働を撲滅する。 |
| 8.8 | 移住労働者、特に女性の移住労働者や不安定な雇用状態にある労働者など、全ての労働者の権利を保護し、安全・安心な労働環境を促進する。 |
| 8.9 | 2030年までに、雇用創出、地方の文化振興・産品販促につながる持続可能な観光業を促進するための政策を立案し実施する。 |
| 8.10 | 国内の金融機関の能力を強化し、全ての人々の銀行取引、保険及び金融サービスへのアクセスを促進・拡大する。 |
| 8.a | 後発開発途上国への貿易関連技術支援のための拡大統合フレームワーク（EIF）などを通じた支援を含む、開発途上国、特に後発開発途上国に対する貿易のための援助を拡大する。 |
| 8.b | 2020年までに、若年雇用のための世界的戦略及び国際労働機関（ILO）の仕事に関する世界協定の実施を展開・運用化する。 |

（出典：外務省「JAPAN SDGs Action Platform」）

表 2-5 は、パフォーマンス課題を評価するための評価基準（ルーブリック）である。ルーブリックの記述語（評価基準）は、永続的理解（労働についての基本的な考え方）、伝達（論理性、根拠の明示）、考察（提言内容）の3つの要素から構成することとした。学習者が、自身の学習到達度を把握し、より質的に高いレベルとは何かを理解することで、学びの指針として機能させたいと考えた。このため、できるだけ、学習者に分かりやすい表現となるよう工夫した。

表 2-5 「労働」に関するパフォーマンス課題の評価基準（ルーブリック）

| レベル | 記述語（評価基準） | | |
|---------------|--|---|--|
| | 永続的理解（労働についての基本的な考え方） | 伝達（論理性、根拠の明示） | 考察（提言内容） |
| 5 素晴らしい | ・「働きがいのある人間らしい働き方」も「経済成長」もともに推進できる考え方が明示されている。 | ・課題に対する解決方法が論理的である。 ・調査によって得られた情報の確に論拠となっている。 | ・独創的な提案である。 ・自身の行動変革の視点がある。 ・「全ての人」にとっての改善の視点がある。 ・環境の改善の視点がある。 |
| 4 良い | ・「全ての人」にとっての「働きがいのある人間らしい働き方」が明示されている。 | ・課題に対する解決方法が概ね論理的である。 ・調査によって得られた情報が論拠となっている。 | ・「全ての人」にとっての改善の視点がある。 ・環境の改善の視点がある。 |
| 3 合格 | ・「自分」にとっての「働きがいのある人間らしい働き方」が明示されている。 | ・課題に対する解決の方法がまとめられている。 ・調査によって得られた情報が明示されている。 | ・「自分」にとっての改善の視点がある。 ・環境の改善の視点がある。 |
| 2 もう一歩 | ・「働きがいのある人間らしい働き方」の明示が不十分である。 | ・課題に対する解決方法がまとめられていない。 ・調査によって得られた情報が明示されていない。 | ・「自分」にとっての改善の視点がない。 ・働き方に関する改善の視点がない。 |
| 1 かなり改善が必要 | ・「働きがいのある人間らしい働き方」が明示されていない。 | ・課題に対する解決方法が明示されていない | ・提言がされていない。 |

第5節 まとめ

本研究の結果から、以下の知見を得た。

教科横断的な探究的な学習について検討した結果、有効性が示唆された。成果として把握できたことは2点あげられる。

1点目は、授業後に行った学習者に対する質問紙調査では、「労働」について考える視点が広がったか」という質問に対しては、「とてもそう思う」「そう思う」の肯定的意見が83%であった。テーマごとの中間発表、意見交換やグループでの発表などの学習活動を通して、多様な意見や考えを知り、自らの考えを深めたり視野の広がりを実感できたりできたことや、1つのテーマのもと、教科のつながりを意識した授業を行うことで、学びが繋がっていると実感できたことが、肯定的な自己評価につながったのではないかと考えられる。教科の関係性を意識して教科を横断するテーマを設定した探究的な学習においては、視野の広がりを実感させることについて有効であると考えられる。

2点目は、4教科の授業担当者が、教科の関係性を意識して、授業計画をたて、使用するワークシート等の教材を検討し、授業に取り組むことができたことである。1つのテーマのもと、教科間関係性を意識しつつ、それぞれの教科の視点から課題を提起するという教科横断型授業の可能性を見いだすこ

とができた。

今後の課題としては、教科横断型授業を行うには、各科目の授業担当者が、到達目標（「本質的な問い」に対する「永続的理解」）の共通理解を十分に図ることが重要であり、その上で、教科の特性を生かしてどのような展開をするのかを検討することが必要である。さらに、教科間の関連性を深く感じられるよう共通の課題（パフォーマンス課題）を設定することが重要であると考え。

授業後に実施した学習者に対する質問紙調査の結果から、肯定意見の割合が高かった項目は、「人は働いて収入を得ていかなければならない」という「労働の価値や意義の理解」は88.8%、「人生設計を考えるには、生活・仕事・家族・社会環境等について考えなければならないと思う」という「視野の広がり」は85.9%であった。一方、「(労働の学習を通して) 職業選択について改めて考えてみようと思った」という「自分毎として考えられたか」は59.5%、「どんなに小さな事でも私が何かを変えていくことで、労働をめぐる環境は変わらと思う」という「市民としての地域・社会への実践力の必要性」は57.2%、「ワークライフバランスは取れると思う」という「生活への展望」は44.7%で、他項目と比較すると肯定意見の割合が低かった。課題としては、現代社会の諸課題を自分ごととして捉え、創造的に課題を解決しようとする力を育むためには、学習者が、他者の考えに触れるだけでなく意見や考えを批判的に捉え、さらに吟味・検討し、学習者自身の実生活での意思決定につながる場面を設定することが必要だと考える。さらに、学習者が、地域や地球規模の諸課題についても、自らの課題として考え、持続可能な開発目標（SDGs）なども踏まえ、創造的に解決策を提案するような課題を設定することも必要であると考え。

注

1) 8.5 2030年までに、若者や障害者を含むすべての男性及び女性の、完全かつ生産的な雇用及び働きがいのある人間らしい仕事、ならびに同一労働同一賃金を達成する。8.6 2020年までに、就労、就学及び職業訓練のいずれも行っていない若者の割合を大幅に減らす。8.7 強制労働を根絶し、現代の奴隷制、人身売買を終らせるための緊急かつ効果的な措置の実施、最悪な形態の児童労働の禁止及び撲滅を確保する。2025年までに児童兵士の募集と使用を含むあらゆる形態の児童労働を撲滅する。8.8 移住労働者、特に女性の移住労働者や不安定な雇用状態にある労働者など、すべての労働者の権利を保護し、安全・安心な労働環境を促進する。

参考文献

中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」文部科学省（2016）

西岡加名恵（2017）『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』明治図書出版

西岡加名恵編（2016）『教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか—』図書文化社

松下佳代（2007）『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準国際連合広報センターHP

https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

第3章 教科横断型の探究的な学び（グローバル・ヒューマン学）の全体構想

第1節 育成する資質・能力

教科横断型の探究的な学び（グローバル・ヒューマン学）は、現代社会の諸課題について、「世界史A」、「現代社会」、「保健」、「家庭基礎」の各科目を教科横断的に扱い、グローバルな視点に加えて、科学的な視点を組み込み、多角的な視点で考察を加えながら議論するなど、探究的な学びを展開するとしている。このような変化の激しい現代社会において求められる力は以下のようなものがある。

（1）社会の変化に対応する資質・能力

国立教育政策研究所（2013）の研究では、学校で学んだ知識や技能を定型的に適用して解ける問題は少なく、問題に直面した時点で集められる情報や知識を入手し、それを統合して新しい答えを創り出す力が求められている、としている。なおかつ、アイデアや情報、知識の交換、共有、およびアイデアの深化や答えの再吟味のために、他者と協働・協調できる力が必須となっており、このような協調的・創造的な問題解決のために、どのような分野においても学び続ける力が基礎となる、としている。中央教育審議会答申（2016）は、社会が成熟社会に移行していく中で、特定の既存組織のこれまでの在り方を前提としてどのように生きるかだけでなく、複雑で変化の激しい社会の中で、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力がますます重要となる、としている。

（2）21世紀型学力（教科・領域横断的に学習することが求められる資質・能力）

図3-1の左側は、国立教育政策研究所（2013）が整理した21世紀型能力の資質・能力の構造化のイメージである。図3-1の右側は、国立教育政策研究所の示す「実践力の育成」について筆者がイメージ化して作成したものである。

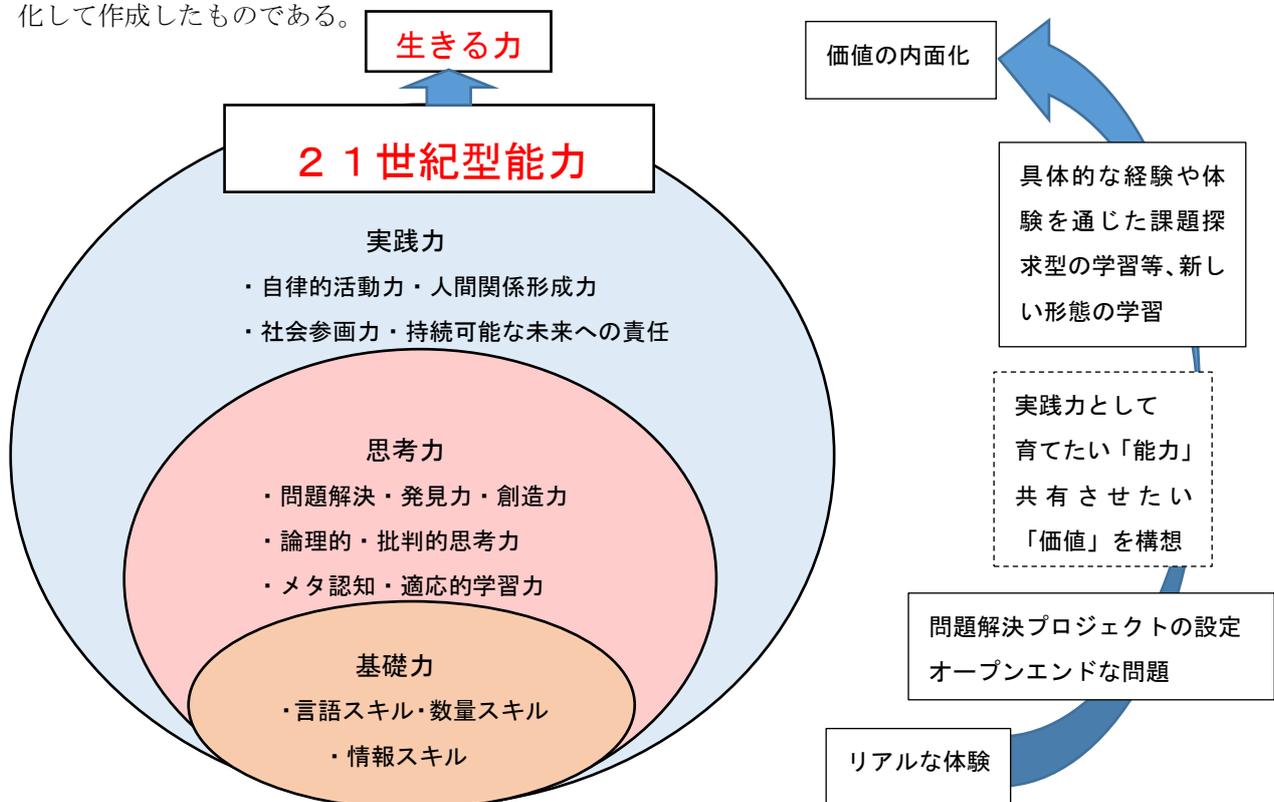


図3-1 資質・能力の構造化のイメージ

注）（左側）国立教育政策研究所が整理した資質・能力の構造化のイメージ、（右側）実践力の育成について、国立教育政策研究所が示したものを筆者がイメージして作成

21世紀型能力とは、「生きる力」としての知・徳・体を構成する資質・能力から、教科・領域横断的に学習することが求められる能力を資質・能力として抽出し、これまで日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえつつ、それらを「基礎」「思考」「実践」の観点で再構成した日本型資質・能力の枠組みである。これからの教育目標としての資質・能力を具体的に「21世紀型能力」として仮置きし、資質・能力を育成することができる教育課程の在り方を検討し、加えて、具体化することから派生する課題を見極め、解決のための選択肢を提案している。

「実践力」の育成には、「基礎力」をもとに、「思考力」を働かせながら、実生活上の成功体験・失敗体験などのリアルな体験や経験を通して育成する総合的なアプローチが求められている。実生活や実社会で生きて働く力、すなわち「実践力」を育成するためには、現実のリアルな課題をもとに問題解決プロジェクトを設定し、具体的な経験や体験を通じた課題探求型の学習など、学習者の生活意欲、学習意欲、知的好奇心を十分に引き出すような新しい形態の学習をデザインしていく必要がある。子どもたちが実生活や社会の中で直面するような、リアルで正答がない、あるいは答えが一つではないようなオープンエンドな問題を扱い、多様な選択肢や可能性を意見や立場の異なる様々な他者と共に検討しながら、よりよい選択肢や納得解を探求していく学習活動が求められているのである。「実践力」として育てたい「能力」と共有させたい「価値」を構想し、それに基づいて様々な教育課題に応えるカリキュラムを具体的に開発していくことによって、体験的な問題解決学習のなかで体験を振り返って学習した価値を内面化する思考、いわゆる「価値の内面化」が図られる。体験と思考を結びつける教育活動によって、様々な価値が自分の生き方として身に付き、社会で出会う様々な具体的な場面で実践する力が育つと期待できる。

（3）現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力

中央教育審議会答申（2016）は、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力として、以下のようものが考えられる、としている。

- ・健康・安全・食に関する力
- ・主権者として求められる力
- ・新たな価値を生み出す豊かな創造性
- ・グローバル化の中で多様性を尊重するとともに、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史について理解し、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力
- ・地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力
- ・自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力
- ・豊かなスポーツライフを実現する力

（4）教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成

学習指導要領（平成30年告示）は、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成について、以下のよう示している。

- ① 各学校においては、生徒の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科・科目等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。
- ② 各学校においては、生徒や学校、地域の実態及び生徒の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる

資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう、各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。

第2節 教科横断型の探究的な学習

学習指導要領(平成30年告示)においては、「カリキュラム・マネジメント」について、「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」「教科内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること」「教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること」を実現することとされた。

教科横断的な視点からの教育課程の編成や探求型の学習についての先行研究では、磯崎(1996)は、クロスカリキュラムを、「伝統的教科領域の枠組みを超えて横断的かつ柔軟性をもって行う教授・伝統活動であり、基本的には、幅広く調和のとれたカリキュラムの達成にとって必要な要素」と定義している。また、高階(1996)は、「教科等をつなぐカリキュラムであって、あるテーマに基づいて近接した教科等の内容をまとめ、数時間の学習活動として単元的に構成するもの」と定義している。さらに、その意義を次の6点に整理している。

- ① 教育内容の厳選がいわれているように、学習テーマに即して重点化されるから指導を徹底しやすい。各教科等に分散している細切れの指導を避けることができる。
- ② 環境教育や国際理解教育のように各教科にまたがる学習内容を統合して単元構成することが可能である。
- ③ 教科、道徳、特別活動の性格をそのまま活かすことによって、それぞれの特質を引き出すことができる。そのため現行の学習指導要領でも可能なカリキュラムである。
- ④ 教科では「認識」を、道徳や特別活動で「行動力」を、というように「認識」と「行動」の統合が可能である。生活に密着したカリキュラム構成ができる。
- ⑤ 学校や児童・生徒の実態、地域の実態等を加味することによって、より实际的で柔軟なカリキュラムを構成できる。
- ⑥ クロスカリキュラムは、一つのまとまりをもった単元構成ができるため、環境教育を1学期に、国際理解教育を2学期に、人権尊重教育を3学期に、というようにまとめ取りの指導が可能である。当然、年間を通したカリキュラム、一定期間の継続あるいは断続的なカリキュラムも可能である。

2002年以降は、「総合的な学習の時間」が必置されたために、既存の教科・領域を組み合わせなくても、そこで実施することが容易になっているが、課題も指摘されている。田中(2017)は、クロスカリキュラムの編成は、児童生徒の学習意欲の向上や、認識と行動の統一、現代的なテーマに即した幅広い知識や技能の習得といった学習効果が認められるため、有効なカリキュラム編成の方法論であるとしている。しかしながら、クロスカリキュラムに含まれる教科や領域の数が増えるほど、また、そこにかける時間数が増えて単元が大型化するほど、複数の教員がオムニバス形式で担当する場合には、児童生徒にとってクロスカリキュラムは、その意義と効果を実感できる主体的で問題解決的な学習になるよりも、モザイク的で関連性が見えにくい教養講座的な学習になる傾向があると指摘している。

本研究では、教科横断型、教科横断的、教科横断の視点など様々な表現がされているが、資質・能力を育成するために、教科を横断し、教科の枠を超えて教育課程を編成するという意味では同じであると捉える事とする。以下に、中央教育審議会答申で示されている教科横断的な視点から教育課程の編成のイメージ、授業実践事例を示す。

(1) 教科横断的な視点から教育課程の編成（食育に関するイメージ）

中央教育審議会答申（2013）は、学校において、健康で安全な生活を送ることができるようにするとともに、生涯にわたって健康で安全な生活や健全な食生活を送るために必要な資質・能力を育み、安全で安心な社会づくりに貢献することができるようにすることが重要であり、これらを教科等横断的な視点で育むことができるよう、教科等間相互の連携を図っていくことが重要であるとしている。図 11 は、教科横断的な視点から教育課程を編成（食育に関するイメージ）として示された図から、高校の部分抜粋して筆者が作成したものである。

表 3-1 教科横断的な視点から教育課程を編成（食育に関するイメージ）

| | | | | | | |
|--|--|---|--|---|----------------------------|--|
| 【地理】 食料問題 について 地球的視 野からと らえ探究 | 【公民】 食料問題 について 政治と経 済を関連 させ探究 | 【家庭】 食品や調理などの 基礎的・基本的な知 識と技能を習得し、 生涯を通して健全 な食生活を実践 | 【保健体育】 継続的な食 生活を実践 する必要 性を理解 | 【道徳】 食事やマ ナーなどの礼儀を 理解、食べ物を大 切にし、食べ物を 作った人への感謝 と念と態度を育成 継続的な食生活を 実践する必要性を 理解 | 国 語 ・ 理 科 等 | 【総合的な学習 の時間】 学校や地域の実 情に応じた食に 関する探究的な 学習 |
|--|--|---|--|---|----------------------------|--|

注) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）別紙 4 から高校の部分抜粋して筆者が作成

(2) 授業実践事例

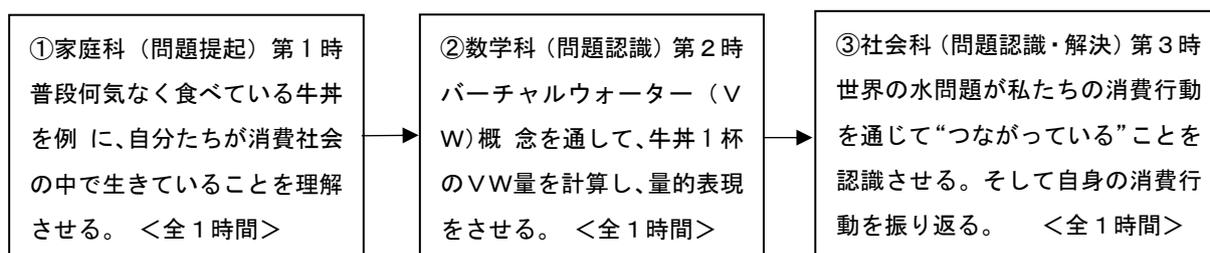
① 「消費」をテーマとした「教科横断・問題解決型授業」

2008 年度に福井大学大学院教育学研究科で開設された新科目「協働実践研究プロジェクト」の中の「問題解決リテラシー」群による「教科横断型授業」に関する開発研究で、2009-2010 年度の家家庭科・社会科・数学科・理科の教員と大学院生との協働によって開発したものである。中学校授業『消費社会における問題意識の構築—水問題を素材に—』の授業構想である。本授業は、ストーリー方式で構想したものである。(橋本ら 2011)。

授業構想

- ・テーマ：『消費社会における問題意識の構築—水問題を素材に—』
- ・対象学年：中学校 3 年生 ・授業目標
 - ア 自分たちの消費行動が社会に影響を及ぼしていることに気付く。
 - イ これからの消費のあり方について、一生活者として、一社会人として考えようとすることができる。
 - ウ 水を取りまく世界規模の状況の一端を知り、問題意識を持つことができる。
- ・単元構成（全 3 時間）：テーマ「消費社会における問題意識の構築—水問題を素材に—」（表 3-2）

表 3-2 単元構成 (全 3 時間)



注) 橋本康弘・荒井紀子・伊禮三之・松田真依・荒井紀子・伊禮三之・山本博文・橋本康弘・池島将司・行壽浩司・

二丹田雄一・山田志穂・吉村祐美 (2011)「教科横断型授業」の開発研究Ⅱ— 2009・2010 年度協働実践プロジェクトでの取り組みから—。福井大学教育実践研究, 36 : 35-42.

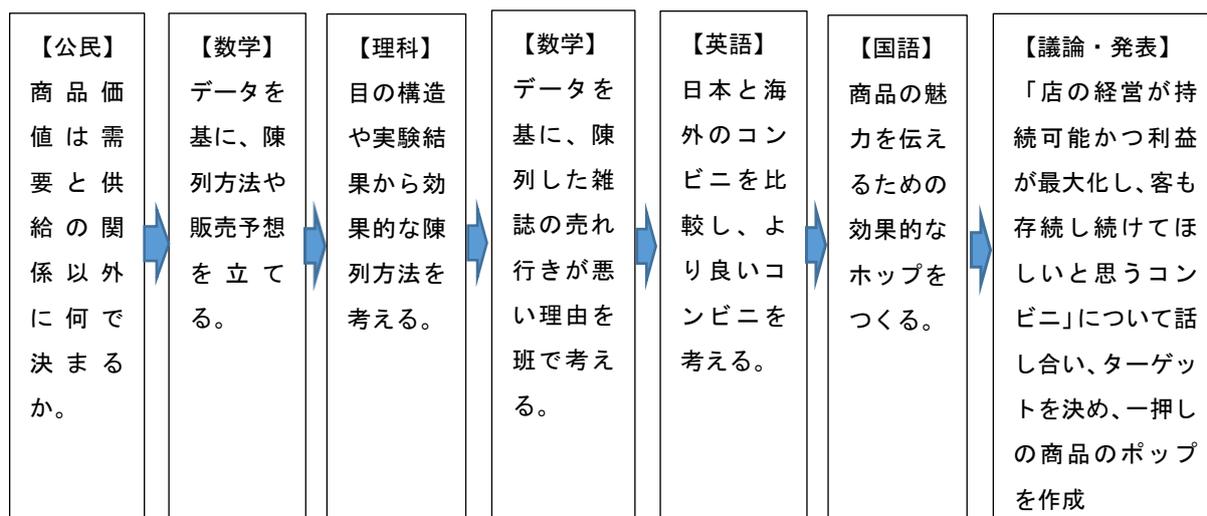
② 5 教科横断型の合同授業

石川県・富山県の有志の教師 6 人が集まり、仮想の高校「平和町高校」の教師として授業を行った。

参加した生徒は、4 校の 20 人 (1・2 年生) で、各校の生徒が 1 人ずつ入った 4 人 1 組の班で授業を行った。

- ・授業のテーマ 「コンビニを科学する ～平和町に理想のコンビニを創ろう～」
- ・授業の概要 コンビニエンスストアの売りに影響する要素について、社会・数学・理科・英語・国語のアプローチでそれぞれに考える授業を 20 分間ずつ実施後、「店の経営が持続可能で、かつ利益が最大化し、客も存続してほしいと思うコンビニ」について、班ごとに話し合い、それぞれの案を発表する。ターゲットとなる客層を設定し、その客層に向けた一押しの商品とそれを陳列する位置を決め、商品を宣伝するポップを作成することを目標とした。

表 3-3 授業概要



注) View21 高校版 2019(2) ベネッセコーポレーションベネッセ教育総合研究所を基に筆者が作成

第3節 家政学・家庭科教育の視点

(1) 家政学の定義

日本家政学会家政学原論部会（2013）は、部会設立 50 周年（2018 年）に向けて、「家政学原論部会行動計画 2009－2018」を策定した。家政学的研究ガイドラインは、家政学的研究の拠り所となる考え方を示したものである。本ガイドライン案では、過去の家政学原論研究の蓄積をふまえ、時代を超えて変わらない家政学の基礎概念や独自性を明確にする一方で、現代社会における家政的環境をとりまく諸課題に配慮し、これからの家政学的研究の指針となる諸要素を抽出し明示することを目指した。

ガイドラインでは、家政学の定義を以下のように示している。

家政学とは、個人・家族・コミュニティが自ら生活課題を予防・解決し、生活の質を向上させる能力の開発を支援するために、家庭を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について研究する実践科学であり、総合科学である。家政学は、生活者の福祉の視点から、持続可能な社会における質の高い生活を具現化するライフスタイルと生活環境のありようを提案する。

(2) 家政学と他の学問領域との関り

家政学は、持続可能な社会における「生活の質とは何か」を研究する学問である。生活の質を明らかにするために、「人間」、「生活」、「生活環境」および「人間が生活環境に及ぼす影響と生活環境が人間に及ぼす影響の両側面（人と人、人とモノとの相互作用）」について研究する。生活の質を研究することにより、人間（人類）にとっての基本的な生活とは何かを提示することができ、それを土台として持続可能な社会における質の高い生活のありようを具体的なライフスタイルとして、またそのライフスタイルを可能にする生活環境のありようを提案することができる。家政学は、質の高い生活を家庭生活を通して実現しようとする点に、また、理論にとどまらず生活課題の解決をめざす実践科学であり、研究においても課題解決においても対象を全体的（ホリスティック）な視点で統合する総合科学である点に特色がある（日本家政学会家政学原論部会 2013）。表 4-1 は、家政学と他の学問領域との関りを示したものである。

表 3-4 家政学と他の学問領域との関り

| 学問領域 | | 関連する科目 |
|------|--|---------------------|
| 総合科学 | 家政学 ・人とモノとの関係（物的環境）に関する食物学、被服学、住居学 ・人と人との関係（社会環境）に関する児童学、家族関係学、生活経営学 ・家政学原論 | 家庭基礎 |
| 境界領域 | ・食品化学、家族社会学、消費経済学、服装美学、児童心理学 など | |
| 基礎科学 | ・自然科学、社会科学、人文科学における諸科学、生物学、化学、物理学、社会学、法学、経済学、社会学、文化人類学、哲学、美学、心理学 など | 現代社会 世界史 A 保健 |

(3) 持続可能な開発目標（SDGs）と家政学との関り

2015 年 9 月の国連サミットで、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、「国連持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択された。アジェンダは、人間、地球および繁栄のための行動計画として、宣言および 2030 年を期限とする持続可能な 17 の開発目標

(SDGs) と 169 のターゲットからなる。国際家政学連盟 (2019) は、持続可能な 17 の開発目標のなかで、家政学の観点から貢献できる 6 つの目標について、具体的な取組を挙げている (表 4-2)。SDGs の目標は、家政学がまさにめざすものである。

表 3-5 すべての人々の持続可能な生活の実現：ホームエコノミクスの観点

| 目標 | 家政学の視点からのアプローチ・家庭科教育の内容 (主なもの) |
|---------------------------------------|--|
| 目標 1 あらゆる形態の貧困を終わらせる | 健康的な栄養と効率的な調理の訓練、衛生的な行動や母体及び家族の健康、日常生活管理、財政的資源を持続的に管理する方法等の金融リテラシー、水とエネルギーの持続可能なコストの削減、家族や世帯の持続可能な生計手段 等 |
| 目標 2 飢餓をゼロに | 持続可能な食事、食料生産と食料消費の相互関係、肥満と調理法や健康的な食事パターン、安定的に収入を創出する方法、健康的な栄養、効率的な調理のトレーニング 等 |
| 目標 3 すべての年代で健康な生活を確保し、全ての人の幸福を促進する | 基本的な衛生行動 (手洗い、食品加工、清掃)、健康と栄養、食物アレルギー、健康的な食事、健康上のリスクの回避 等 |
| 目標 5 男女平等を達成し、全ての女性と女の子に力を与える | 男女平等は、基本的な人権だけでなく、平和で繁栄し、持続可能な世界に必要な基盤、男女共同参画 等 |
| 目標 6 全ての人に対する水と衛生の可能性と持続可能な管理を確保する | 衛生的な行動が健康に及ぼす影響、持続可能な廃棄物の管理、仮想水の使用した消費行動 等 |
| 目標 12 持続可能な消費と生産パターンの確保 | 持続可能な方法での消費、持続可能な消費のための新しい知識 (例えば食品廃棄物、織物の持続可能な生産、エネルギー効率の良い料理) 等 |

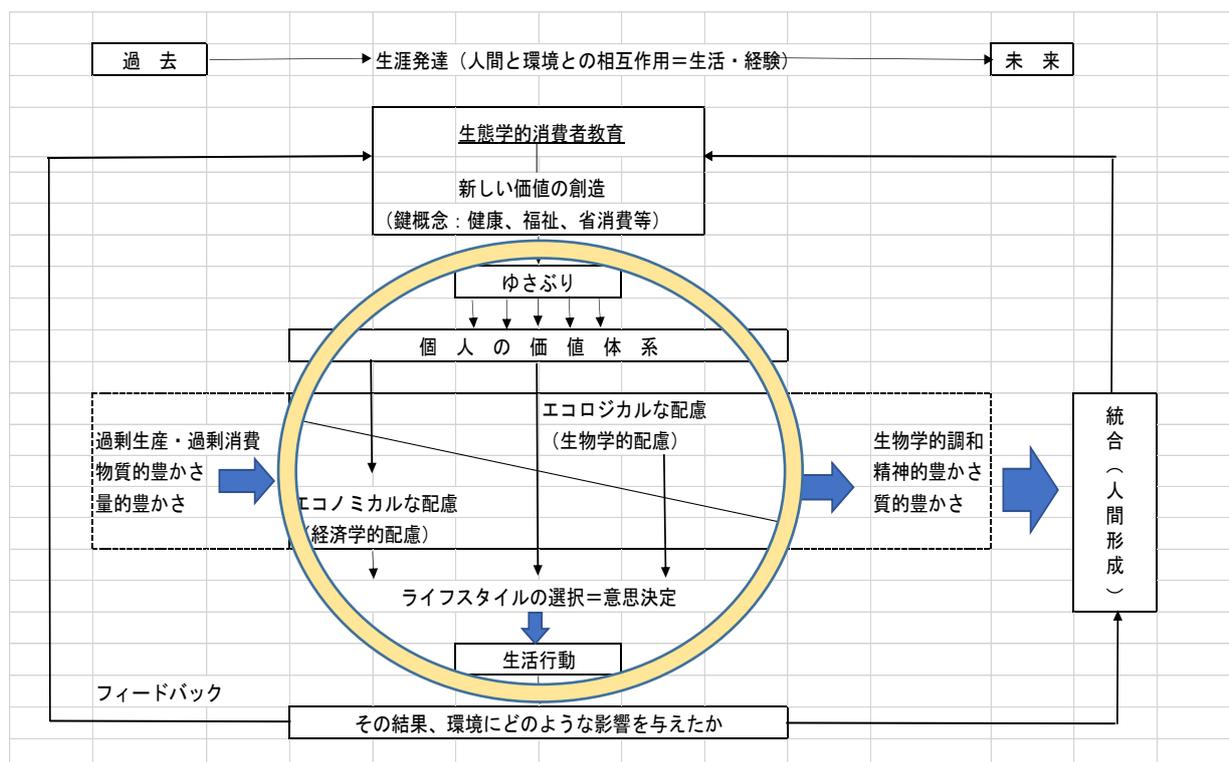
注) 国際家政学連盟 HP 資料を参考に、筆者が作成

https://www.ifhe.org/fileadmin/user_upload/IFHE_2019/UN_Activities/7_Overview_Home_Economics_and_SDGs_2019.pdf

(4) ヒューマンエコロジー (環境との共生を図る人間の生き方・在り方)

リチャーズ (E. H. Swallow Richards: 1842~1911) のヒューマンエコロジー思想を今日の教育としていかに具体化するかについて、その理論的枠組みの一つとして提案する STS 家庭科は、つながりの下でいかに生きるかを問う市民教育として、子どもたちの「生きる力」と豊かな人間性の育成に積極的にかかわるものである。STS とは、Science-Technology-Society の頭文字をつないだものであり、STS 教育とは社会・文化との文脈 (かかわり)、すなわちその状況、関連性の下で適切な人間生活の在り方を問う学習方法の一つである。我が国においては、STS 教育は理科や社会科の現代的アプローチとして発展してきている。STS 教育は多様性と広がりを持つ”統合”の見地に立つ。自己の判断の最初のステップとして全体に近づくためには、関係性を理解しなければ困難であり、その一手段として、STS 的見方がある。図 3-2 は、エコロジカルなライフスタイル、とりわけ消費生活と人間形成のホリスティックな関係を表したものである。シンプルな消費生活は、生態系の安定と人間の精神の開放に不可欠であると同時に、健全な人間発達にとっても欠くことができないものである。ヒューマンエコロジー (環境との共生を図る人間の生き方・在り方) は、見方を変えれば、生活と教育を分かちがたい一つの統一体とみなす思想

であるともいえよう（住田ら 2014）。



注) 今村・住田「環境教育としての消費者教育に関する諸考察(2)」『日本家庭科教育学会誌第36巻第2号』

図 3-2 人間形成と消費生活の関連（筆者が付記）

今村・住田（1993）の人間形成と消費生活関の関連（図 3-2）は、個人の価値体系が揺さぶられ、エコロジカルな配慮とエコノミカルな配慮のバランスをどう選択していくのかの価値選択をしていく過程、すなわちライフスタイルの選択＝意思決定の過程を経験するなかで人間形成がなされていくというものである。黄色の円で囲った部分（筆者が付記）のような価値選択ができる資質・能力の育成が求められている。

（5）「総合学習」としての STS 家庭科（HE-Com）の授業構成

住田ら（2014）は、「総合学習」という観点は、本来、教科の有機的つながりを意味し、そのなかで「生きる力」は育まれるが、見落としてならないことは、そこに共有される教育価値の存在である。この教育価値から教育実践における様々なテーマが出てくる。例えば、「共生」、「環境」、「福祉」、「健康」、「省消費」等が挙げられる。これらは、人々の未来や希望につながる普遍的価値である。このようなテーマはあらゆる教科からアプローチが可能となる。このアプローチの仕方が教科によって異なるだけであり、全ての教科がトータルに機能してこそ、真の人間形成に向かうのである、としている。

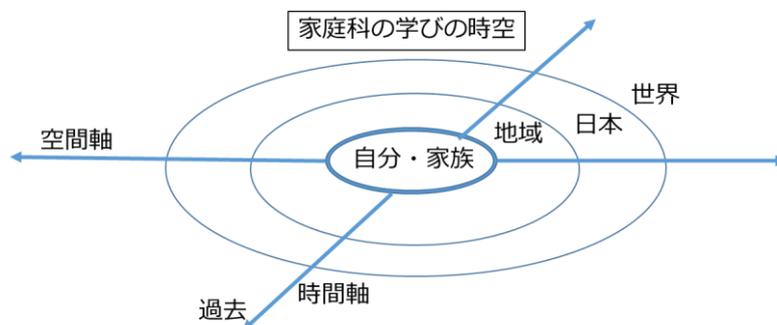
表 3-6 STS 家庭科学習（HE-Com）プログラム開発の指針（授業構成のためのプロセス）

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① ヒューマンエコロジー思想の導入（＝HE-Com の哲学的基盤） ② 個人（児童・生徒）と社会とのかかわり、すなわち部分と全体の関係の 視点 ③ 具体的な学習目標/評価基準の設定 ④ 教育目標の遂行に向けた展開 ⑤ 授業の評価・反省 |
|---|

注) 今村・住田「環境教育としての消費者教育に関する諸考察(2)」『日本家庭科教育学会誌第36巻第2号』を基に筆者が作成

(6) 新しい家庭科の学びをデザインする

荒井ら(2012)は、家庭科を学ぶにあたって、高校生が今のような時点に・地点にいるかについて自覚し、ものごとをマクロからミクロへ、あるいはその逆への自在にとらえることを意識させることで、自分自身を取り巻く生活課題について、広い視野から学ぶことができる、としている。



注) 荒井ら(2012)「パワーアップ家庭科」より

図 3-3 高校生の時間軸・空間軸

また、生徒にとって「人ごと」でない学びがどのようなものか。生徒が生涯にわたり必要な能力(コンピテンシー)を身につけ、思考力・判断力、生活力を鍛えるには、授業のデザインはどうあったらよいかについて、以下の4つの方略(ストラテジー)を提起している。

- ① 典型としての学習のなかで、基礎と応用・活用をつなげる
- ② 領域を超えて、子どもの学びの文脈をつくる
- ③ 子ども自身の切実な生活課題に向き合わせ、協働の学びをつくる
- ④ 子どもの探究を促す問題解決型の学習サイクルを積みあげる

第4節 家庭科の学びを中核とした授業構想

(1) 教科横断型の探究的な学習の構想

「グローバル・ヒューマン学」(図3-4)は、1学年に2単位の学校設定科目として開設され、現代社会の諸課題を科学的な視点から捉えさせ、生命観、倫理観、歴史観、社会性を養成することを目的としている。この科目の設定にあたり、「世界史A」「現代社会」「保健」「家庭基礎」の学習を効果的に関連付け、かつ教科横断的に実施する必要があるため、その単位の一部を減ずる研究開発の教育課程の特例を受けている。

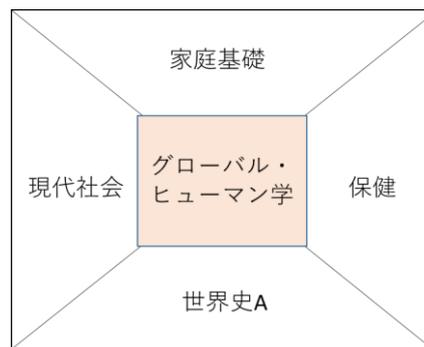


図3-4 4つの科目と「グローバル・ヒューマン学」

これからの予測困難な時代に、子供たち一人一人が、主体的に向き合い関わり合い、その過程を通じて、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていける力を育成できるように、教育課程の改善を図っていくことが求められている。これからの時代に求められる「生きる力」の育成は、まさに「グローバル・ヒューマン学」が目標とするものであり、教科横断的な視点からより効果のある教育課程の編成を検討する「カリキュラム・マネジメント」という点からも、科目として位置づけられた「グローバル・ヒューマン学」には意義があると考えられる。「グローバル・ヒューマン学」は、4つの科目から単位を一部減じて創設された科目であり、「知の構造」化に視点をおいて授業を構想することが必要だと考える。

授業実践からは、教科の関係性を意識し、教科を横断するテーマを設定した探究的な学習は、学習者に視野の広がりを実感させることに有効であり、1つのテーマのもと、教科間の関係性を意識しつつ、それぞれの教科の視点から課題を提起するという授業の可能性を見いだすことができた。また、示唆を得たことは、以下のとおりである。①教科横断型授業を行うには、到達目標の共通理解を十分に図ることが重要である。②その上で、教科の特性を生かしてどのような展開をするのかを検討すること、さらに、教科間に関連性を深く感じられるような共通の課題(パフォーマンス課題)を設定することが必要である。③学習者が、他者の考えに触れるだけでなく意見や考えを批判的に捉え、さらに吟味・検討し、学習者自身の実生活での意思決定につながる場面を設定することが必要である。

(2) 授業設計のプロセスの提案

これまでの研究を踏まえて、授業を設計するプロセス(図3-5)について提案したい。授業設計にあたっては、①教育目標を設定し、授業担当者間で共有することが大切である。教育目標は、人々の未来や希望につながる普遍的価値(永続的理解)であり、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現(SDGs)の視点を取り入れることが考えられる。その上で、②教科の特性を生かしてどのような展開をするのかを検討すること、さらに、教科間に関連性を深く感じられるような共通の課題(パフォーマンス課題)を設定する。パフォーマンスの課題を導入した授業は、各教科の基礎的な知識・理解やスキルをもとに、現実的な課題解決の最適解を導き出そうとするなかで、既習の知識やスキル、経験などが関連付けられ、総合化されていくのではないかと考える。できるだけ、実生活や社会の中で直面するような、リアルでオープンエンドな問題を取り上げるように工夫するとよい。具体的な学習目標を設定し、さらに、③ルーブリックを作成する。ルーブリックは、複数の評価者の間で評価基準を共通理解するうえで有効である。④教科の特性を生かしてどのような展開をするのかを検討し、課題の認識を深めさせる。授業担当者から提示された課題に対して、学習者自身が「問をたてる」ということが必要だと考える。学習者の認識を揺さぶるような働きかけがないと、学習者は受動的で、その後の探究

活動に深まりが見られない。⑤調べ学習・班討論・ディベート等を組み合わせた探究的な学習活動をデザインする。特に、学習者が、他者の考えに触れるだけでなく意見や考えを批判的に捉え、さらに吟味・検討し、学習者自身の実生活での意思決定につながる場面を設定することが必要である。⑥パフォーマンス評価の結果を提示する。学習者からの直接評価や自己評価を生かし、授業や指導方法の工夫・改善に生かす。

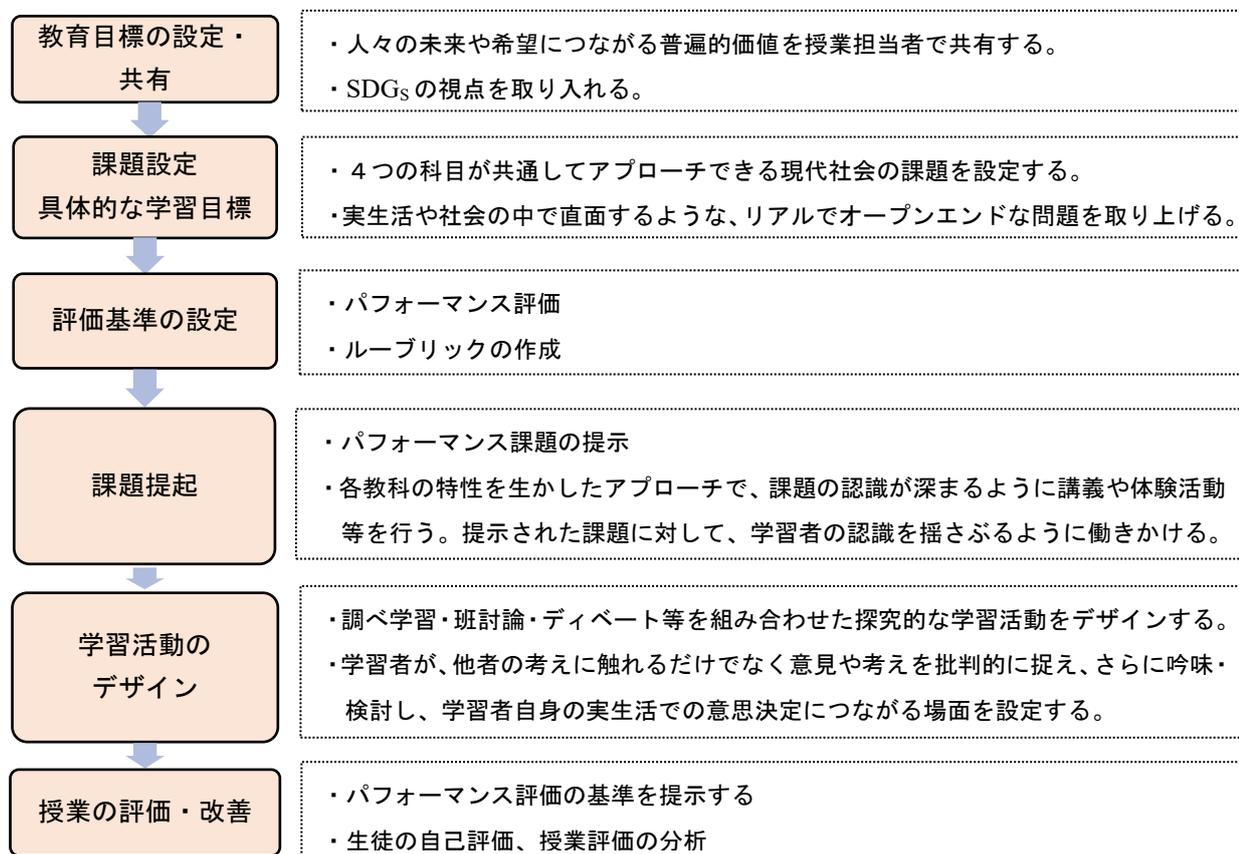


図 3-5 「グローバル・ヒューマン学」の授業を設計するプロセス

(3)「グローバル・ヒューマン学」で取り上げる現代社会の課題

① 基となる4つの科目の学習内容

全体構想を作成するにあたって、各科目の学習内容の関連を検討するために、平成30年度版の使用教科書の目次を整理した(表3-7)。

表3-7 教科書目次

| 世界史A | 現代社会 | 保健 | 家庭基礎 |
|-----------------------|--------------------|----------------------|---------------------|
| 第1部 一体化する世界第1章諸地域境界の特 | 第1部 私たちの生きる社会 | 1 現代社会と健康 | 第1部 人生を見通し共に生きる |
| ①東アジアの世界 | テーマ1 地球環境問題問題 | ①私たちの健康の姿 | 第1章 青年期の自立と家族・家庭 |
| ②南アジア・東南アジア世界 | テーマ2 資源・エネルギー | ②健康のとらえ方健康と意思決定・行動選択 | ①青年期の自立 |
| ③西アジア世界 | テーマ3 科学技術の発展と生命 | ③健康に関する環境づくり | ②家族・家庭を考える |
| ④ヨーロッパ世界 | テーマ4 情報化の進展と生活 | 歴史からみた様々な健康のとらえ方 | 第2章 子どもの発達と保育 |
| ⑤陸と海の交流 | 第2部 第1章青年期と自己形成の課題 | ⑤生活習慣病とその予防 | ①子どもの発達と生活 |
| 第2章 アジア諸国の繁栄 | 1 現代社会と青年の生き方 | ⑥食事と健康 | ②子供の育つ環境 |
| ①モンゴル帝国の形成と解体 | ①現代社会と青年 | ⑦運動と健康 | 第3章 高齢期の生活 |
| ②東アジア・東南アジア諸地域の変動と再編 | ②青年期の発達課題 | ⑧休養・睡眠と健康 | ①高齢者の生活と課題 |
| ③近世の日本と世界 | ③自己形成と社会とのかわり | ⑨喫煙と健康 | ②高齢社会を生きて |
| ④イスラームの世界の再編成 | ④進路と生きがいの創造 | ⑩飲酒と健康 | 第4章 共生社会における地域や家族 |
| 第3章 世界の一体化とヨーロッパ | 2 よりよく生きることを求めて | ⑪薬物乱用と健康 | ①リスクに備える |
| ①大航海と世界の一体化の始まり | ①哲学と人間 | ⑫現代の感染症 | ②高齢者と子育てへの社会的支援 |
| ②16世紀の西ヨーロッパ | ②宗教と人間 | ⑬現代の感染症の予防 | ③ 共生社会に向けて |
| ③17～18世紀の西ヨーロッパ | ③近代科学の考え方 | ⑭感染症・エイズとその予防 | 第2部 生活を営み、自立する |
| ④16～18世紀の東ヨーロッパ | ④人間の尊厳 | ⑮欲求と適応機能 | 第1章 食べる |
| ⑤西欧を中心とする世界の一体化 | ⑤人間性の回復を求めて | ⑯心身の相関とストレス | ①食生活の課題 |
| 第4章 近代の欧米社会 | ⑥日本の伝統思想の考え方 | ⑰ストレスへの対処 | ②食品と栄養 |
| ①イギリス産業革命 | ⑦外来思想の需要と日本人の自覚 | ⑱ストレスに対処しよう | ③食品の選択と保存 |
| ②アメリカ独立革命 | 第2章 日本国憲法と民主政治 | ⑲心の健康と自己表現 | ④食事を調える |
| ③フランス革命 | 1 民主政治とは | ⑳交通事故の現状と要因 | 第2章 住まう |
| ④反動と改革 | ①民主政治の成立 | ㉑交通社会における運転者の資質と責任 | ①被服の機能と着想 |
| ⑤ナショナリズムの時代 | ②基本的人権の確立 | ㉒安全な交通社会づくり | ②被服の管理と計画 |
| ⑥南北アメリカの道 | ③世界と政治体制 | ㉓防災・防犯をめざした社会づくり | 環境に配慮した制作 |
| 第5章 ヨーロッパの進出とアジア | 2 日本国憲法の基本原理 | ㉔応急手当の意義とその基本 | ①さまざま住まいと暮らし方 |
| ①バルカン・西アジア社会の動き | ①日本国憲法と三つの原理 | ㉕心肺蘇生法 | ②安全で快適な住まい |
| ②インド・東南アジアの植民地化 | ②基本的人権の保障(1) | ㉖日常的な応急手当 | ③まちづくりと住まい |
| ③東アジアの変動 | ③基本的人権の保障(2) | ㉗心肺蘇生法を実習しよう | 第4章 消費者市民として生きる |
| ④東アジア国際秩序の変容 | ④新しい人権と人権保障の広がり | 生涯を通じる健康 | ①生涯の経済計画とリスク管理 |
| 第II部 現代社会と日本 | ⑤平和主義と安全保障(1) | ①思春期と健康 | ②消費行動と意思決定 |
| 1 高度資本主義と大衆社会 | ⑥平和主義と安全保障(2) | ②性意識と性行動の選択 | ③持続可能な消費 |
| 2 民主主義と国民国家 | ③ 日本の政治機構 | ③結構生活と健康 | 生涯の生活設計 |
| 第6章 | ①国会と立法 | ④妊娠・出産と健康 | ①生活資源 |
| ①欧米による世界の植民地化 | ②内閣と行政 | ⑤家族計画と人工妊娠中絶 | ②キャリアを見通す |
| ②民族運動と列強の対立 | ③裁判所と司法 | ⑥加齢と健康 | ③持続可能な社会に向けて |
| 第7章 二つの世界大戦 | ④地方自治 | ⑦高齢者のための社会的取組 | ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動 |
| ①第一次世界大戦とロシア革命 | 4 現代政治の特質 | 生涯にわたる健康づくり | |
| ②ヴェルサイユ体制と欧米諸国 | ①選挙の仕組みと課題 | ⑧保険制度とその活用 | |
| ③民族主義の新展開 | ②政党と利益集団 | ⑨医療制度とその活用 | |
| ④世界恐慌とファシズム | ③世論と政治参加 | ⑩医薬品と健康 | |
| ⑤第二次世界大戦 | 第3章 現代社会と法 | ⑪様々な保健活用や対策 | |
| 第8章 冷戦の時代 | 1 現代社会と法 | 社会生活と健康 | |
| ①冷戦の形成と第三世界の登場 | ①法の動き | ①大気汚染と健康 | |
| ②核戦争の危機 | ②社会生活と法 | ②水質汚濁・土壌汚染と健康 | |
| ③多極化と緊張緩和 | ③司法と人権 | ③健康被害の防止と環境問題 | |
| ④冷戦の変質 | 第4章 現代の経済と国民福祉 | 過去の公害から学ぶ環境問題 | |
| ⑤冷戦の終焉 | 1 経済の仕組み | ④環境衛生活動の仕組みと働き | |
| ⑥冷戦下の日本 | ②現代の経済 | ⑤食品衛生活動の仕組みと働き | |
| 第9章 グローバル化する世界 | ③市場経済の仕組み | ⑥食品と環境の保健と私たち | |
| ①グローバル化の進展 | ④国民所得と経済成長 | ⑦働くことと健康 | |
| ②変貌する世界の諸地域 | ⑤金融の仕組みと働き | ⑧労働災害と健康 | |
| ③日本の現状と未来への模索 | ⑥中央銀行の役割と自由化 | ⑨健康的な職業生活 | |
| 現在につながる歴史 | ⑦政府の役割と財政 | | |
| 日常生活の中のグローバル化 | 2 変動する日本経済 | | |
| 持続可能な社会への展望 | ①戦後復興と高度経済成長 | | |
| 「平和」な社会を目指して | ②産業構造の転換と国際経済環境の変化 | | |
| | ③パル後の日本経済 | | |
| | ④中小企業と農業 | | |
| | 3 豊かな生活の実現 | | |
| | ①自立した消費者への道 | | |
| | ②労働者の権利 | | |
| | ③現代の雇用・労働問題 | | |
| | ④社会保障の役割 | | |
| | ⑤環境保全と循環型社会 | | |
| | 第5章 国際社会と人類の課題 | | |
| | 1 国際政治のしくみ | | |
| | ①国際社会の特質 | | |
| | ②国際紛争を避ける仕組み | | |
| | ③国際連合と安全保障 | | |
| | ④国際連合の役割と課題 | | |
| | ⑤冷戦とその後の世界 | | |
| | ⑥軍縮への取り組み | | |
| | 2 国際経済の仕組み | | |
| | ①貿易と国際分業 | | |
| | ②外国為替の仕組みと国際収支 | | |
| | ③戦後国際経済の仕組みとその変化 | | |
| | ④対立と協調の時代 | | |
| | ⑤グローバル化する経済 | | |
| | 3 国際社会と現状と課題 | | |
| | ①地域統合の進展 | | |
| | ②変容する世界経済 | | |
| | ③国際的な格差の是正 | | |
| | ④地域紛争と難民問題 | | |
| | ⑤国境を越えて広がる地球規模の課題 | | |
| | ⑥日本の役割 | | |
| | 第3部 ともに生きる社会をめざして | | |

山川出版

東京書籍

大修館書店

開隆堂

「現代の世界史」

「現代社会」

「現代高等保健体育改訂版」「家庭基礎明日の生活を築く」

さらに、各科目の目次から把握できる学習内容の共通性について、テキストマイニングソフト KHCoder を使用して、共起ネットワーク図（図 4-3）を作成した。

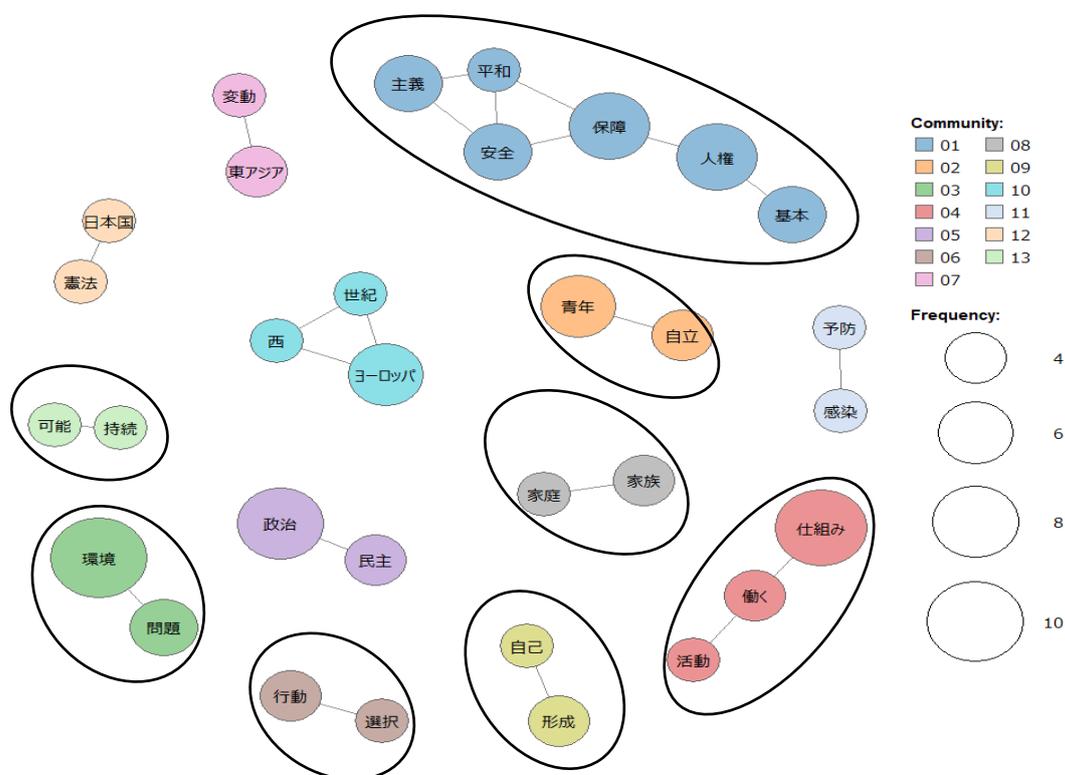


図 3-6 共起ネットワーク図（4つの科目の教科書目次）

4つの科目の共通性をみると、「環境問題」「雇用」「安全・平和・人権・保障」「青年・自立」、「自己・形成」「持続・可能」「行動・選択」「民主・政治」「家族・家庭」「感染・予防」などのテーマが抽出できた。

② 「グローバル・ヒューマン学」で取り上げる現代社会の課題

全体構想を作成するにあたって、各科目の学習内容の関連を検討するために、平成 30 年度版の使用教科書の目次を整理し、さらに、各科目の目次から把握できる学習内容の共通性について、テキストマイニングソフト KHCoder を使用して、共起ネットワーク図を作成した。4つの科目の共通性をみると、「環境問題」「雇用」「安全・平和・人権・保障」「青年・自立」、「自己・形成」「持続・可能」「行動・選択」「民主・政治」「家族・家庭」「感染・予防」等のテーマが抽出できた。

中央教育審議会答申（2016）、持続可能な開発目標（SDGs）の視点、家政学の視点、教科書分析などを踏まえると、「グローバル・ヒューマン学」において取り上げる現代社会の諸課題は、以下のようなものが挙げられる。

- ア 共生に関する課題
- イ 環境に関する課題
- ウ 福祉に関する課題
- エ 健康・安全・食に関する課題
- オ 省消費に関する課題
- カ 労働に関する課題

(4) 家庭科を中核とした授業構想のイメージ

現代の生活をめぐる問題は、個人や家族の努力や工夫の範囲を超えて、地域や国の政策や、制度、さらには地球規模の連携まで視野に入れなければ解決できなくなっている。家庭科の親学問である家政学は、個人・家族・コミュニティが自ら生活課題を予防・解決し、生活の質を向上させる能力の開発を支援するために、家庭を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について研究する実践科学であり、総合科学である。家政学の中心は、人・生命であり、人がいかにによりよく生きるかということを追求することである。

この家政学を学問背景とする家庭科を中核に据えて「グローバル・ヒューマン学」の授業を構想したイメージが図3-7である。「グローバル・ヒューマン学」は、現代社会の諸課題（共生、環境、福祉、健康・安全・食、省消費、労働など）について、「世界史A」、「現代社会」、「保健」、「家庭基礎」の各科目を教科横断的に扱い、グローバルな視点に加えて、科学的な視点を組み込み、多角的な視点で考察を加えながら議論するなど、探究的な学びを展開するとしている。現代社会の諸課題の解決に向けて、家政学が内包する規範的価値である「人間の家族・家庭生活全体の豊かさと安定に貢献できるのか」「次の世代にも豊かな生活の持続性を保証できるのか」「全ての人々にとって安全で安心な生活を持続的に提供できるのか」を問い、現実の生活を中心に据えて思考を深め、意思決定し、行動につなげていくという学びを展開していくことが「グローバル・ヒューマン学」のめざすものではないかと考える。

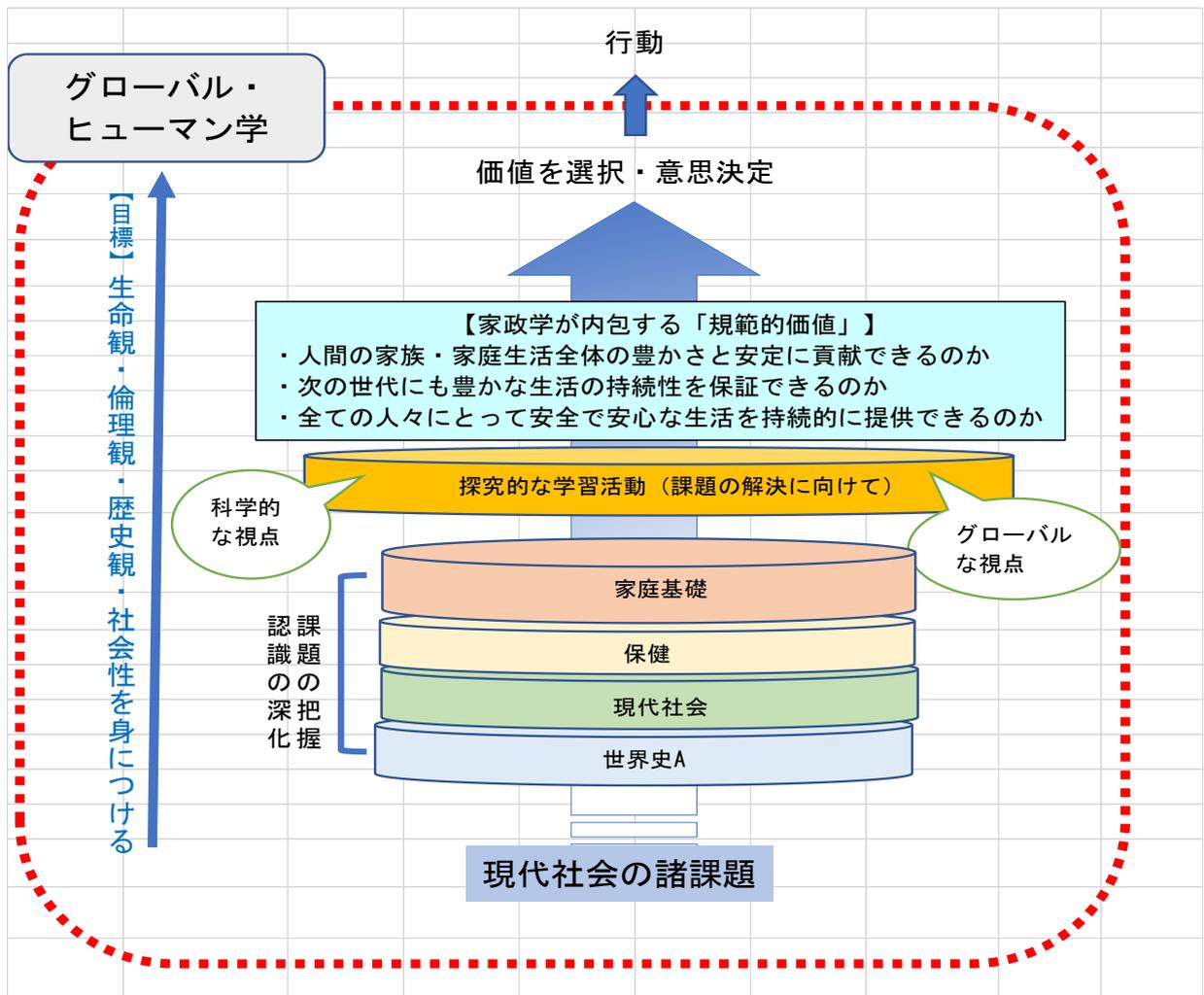


図3-7 家庭科を中核に据えた「グローバル・ヒューマン学」の授業構想イメージ

令和2年度から実施される高等学校学習指導要領（平成30年告示）においては、これまでの「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に改訂された。改訂にあたっては、「問題解決的な活動が発展的に繰り返される探究的な学習とすること、他者と協同して課題を解決する協同的な学習とすることが重要である。加えて体験活動を重視するとともに、思考力・判断力・表現力等をはぐくむ言語活動の充実を図ることが欠かせない。さらには、各教科等との関連を意識した学習活動を展開することなどを踏まえ、学習指導を行うことが大切である。」としている。「グローバル・ヒューマン学」は、教科横断型で探究的に学ぶ教科・科目として、まさに「総合的な探究の時間」を先取りした科目である。また、「グローバル・ヒューマン学」は教科・科目として位置づけられていることから、教育目標を各教科担当者間で共有し、より効果的に教科横断型の学習を進めることができる。さらに、家庭科を中核に据えた授業構想は、持続可能な社会の実現に向けた開発目標（SDGS）の取り組みとも重なっており、他の科目にはない先進性があると考えられる。

第5節 まとめ

教科横断型の探究的な学び「グローバル・ヒューマン学」は、現代社会の諸課題について、「世界史A」、「現代社会」、「保健」、「家庭基礎」の各科目を教科横断的に扱い、グローバルな視点に加えて、科学的な視点を組み込み、多角的な視点で考察を加えながら議論するなど、探究的な学びを展開するとして、SSHの研究開発科目として開設された科目である。先行研究や中央教育審議会答申等から、この科目は、これからの時代に求められる資質・能力の育成に効果があると考えられる。さらに、第1章・第2章の授業実践からの知見を踏まえ、「グローバル・ヒューマン学」をより効果的な授業としていくための視点を以下に提案する。①教科横断型の学習は、学習意欲の向上や、認識と行動の統一、現代的なテーマに即した幅広い知識や技能の習得といった学習効果が認められるが、その意義と効果を実感できる主体的で問題解決的な学習になるように工夫することが必要である。②そのために、授業設計のプロセスを提案した。調べ学習レベルにとどまらないようにするためには、学習者の認識への揺さぶりや学習活動のデザインが必要であり、「知の構造化」が進むような場を創っていかねばならないと考える。③「グローバル・ヒューマン学」では、家政学が内包する規範的価値である「人間の家族・家庭生活全体の豊かさや安定に貢献できるのか」「次の世代にも豊かな生活の持続性を保証できるのか」「全ての人々にとって安全で安心な生活を持続的に提供できるのか」を問い、現実の生活を中心に据えて思考を深め、意思決定し、行動につなげていくという学びの展開をめざす「家庭科を中核に据えた授業」を構想していくことが必要ではないかと考える。本研究では、「グローバル・ヒューマン学」で取り上げる課題の検討、より効果的な「本質的な問い」と「パフォーマンス課題」の設定、適切な「ルーブリック」の検討、さらに、学校現場で活用できる授業案の検討等まで研究を進めることができなかつた。今後の研究課題としたい。

参考文献

- 文部科学省 (2018) 『別冊初等中等教育資料 2 月号臨時増刊』
学習指導要領(平成 30 年告示)
- 田中博之 (2017) 『改訂版カリキュラム編成論—子どもの総合力を育てる学校づくり—』放送大学教育振興会
- 高階玲治 (1998) 『実践クロスカリキュラム 横断的・総合的学習の実現に向けて』図書文化
- 荒井紀子 (2013) 『新版生活主体を育む 探究する力をつける家庭科』ドメス出版
- 荒井紀子 (2012) 『パワーアップ! 家庭科 学び、つながり、発信する』大修館書店
- 荒井紀子ら (2009) 『新しい問題解決学習 Plan Do See から批判的リテラシーの学びへ』教育図書
- 住田和子ら (住田ら 2014) 『改訂生活と教育をつなぐ人間学—思想と実践—』開隆堂
- 日能研 (2017) 『SDGs (国連世界の未来を変えるための 17 の目標) 2030 年までのゴール』日能研
(一社) 日本家政学会家政学原論部会 (2018) 『やさしい家政学原論』建帛社
- 岸本幸臣 (2018) 「第 70 回家政学会「若手の会」基調報告」

終わりに

SSH の研究開発科目である「グローバル・ヒューマン学」の研究に取り組んだのは、現場での実践が少しでも進むようにと考えたからである。論文にまとめてみると、これからの時代にまさに求められる科目であると実感した。本研究が少しでも現場の実践に活かされることを願っている。

謝辞

本研究にあたっては、指導教員として 2 年間にわたり温かくご指導いただいた吉本敏子先生に深く感謝申し上げます。また、副査の増田智恵先生、磯部由香先生は何度も原稿を見ていただき貴重なご助言をいただきました。大学院担当の平島円先生にも大変お世話になりました。何とか論文に仕上げられたのも家政学講座の先生方からのご支援の賜物だと心より感謝申し上げます。また、共同研究という機会をいただいた関係高等学校の校長先生はじめ教職員の皆様に感謝申し上げます。